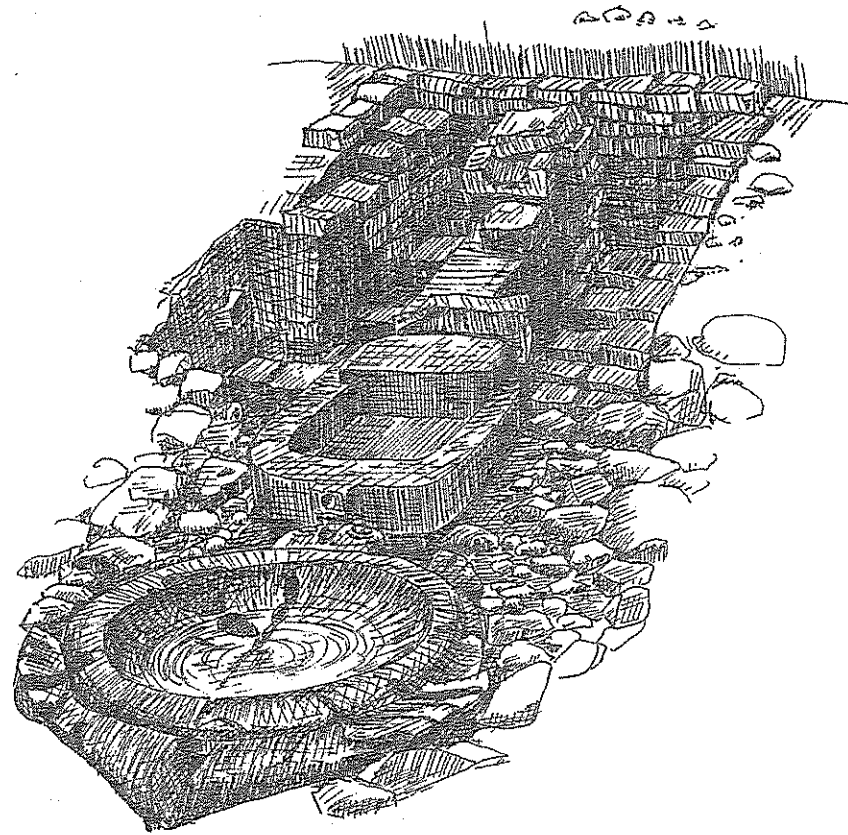


# 明日香村発掘調査報告会

平成11年度調査分



明日香村教育委員会

平成12年11月26日(日)

## 次 第

- ・ 受付 1 : 0 0
- ・ 開会 1 : 3 0
- ・ 開会挨拶 1 : 3 0
- ・ 調査報告 1 : 4 0 ~ 3 : 1 0
  - I 酒船石遺跡の調査 1 : 4 0 ~ 2 : 1 0
  - II 八釣・東山古墳群の調査 2 : 1 0 ~ 2 : 4 0
  - III 石舞台発掘 2 : 4 0 ~ 3 : 1 0
- ・ 記念講演 3 : 3 0 ~ 4 : 3 0
  - 「最近の明日香地域の成果と課題～古都飛鳥を考える～」
  - 講師 関西大学名誉教授
  - 明日香村文化財顧問 網 干 善 教 氏
- ・ 閉会挨拶 4 : 3 0
- ・ 閉会

# 調査報告

I 酒船石遺跡の調査

西光慎治

II 八釣・東山古墳群の調査

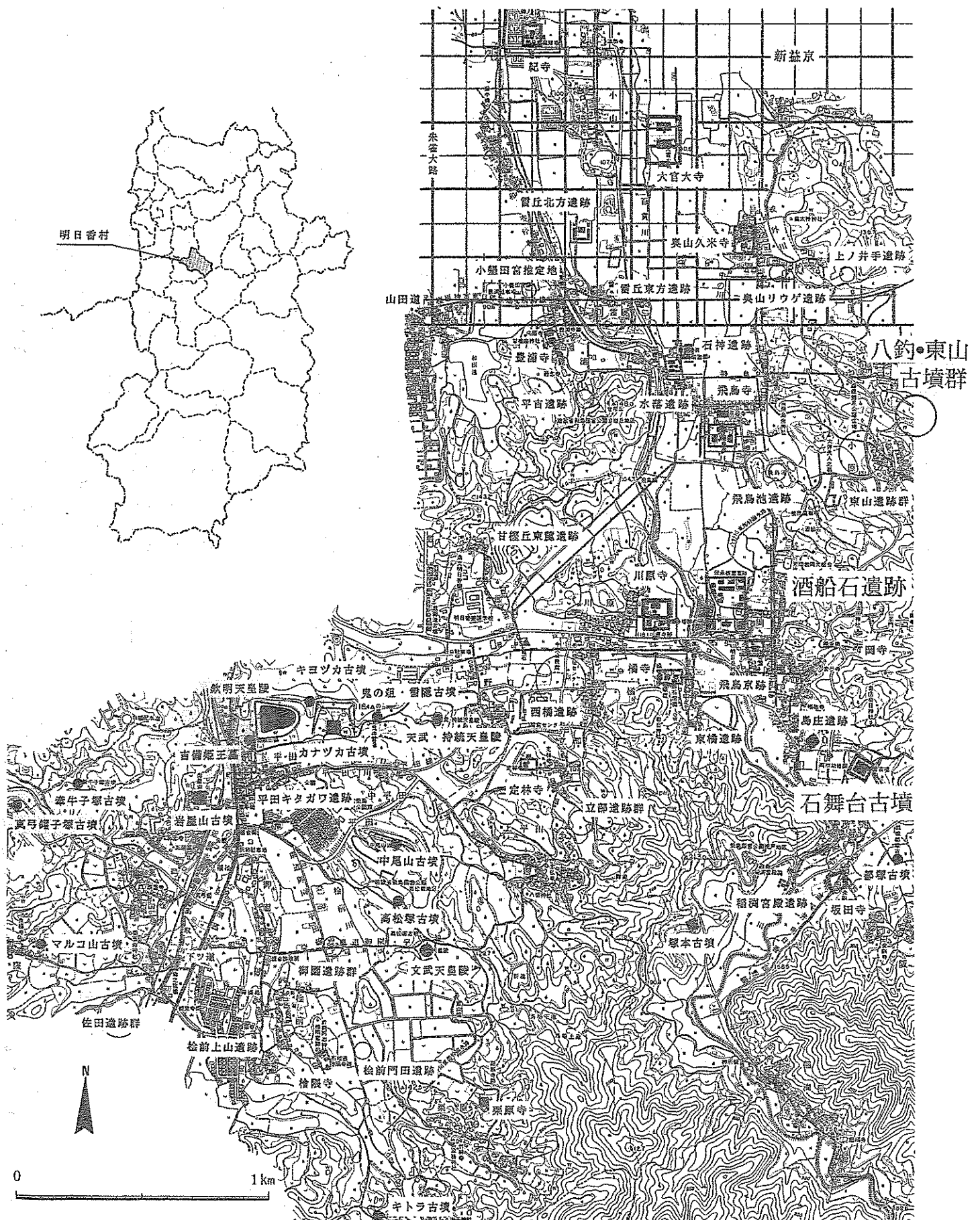
相原嘉之

III 石舞台発掘 (昭和8年調査フィルム)

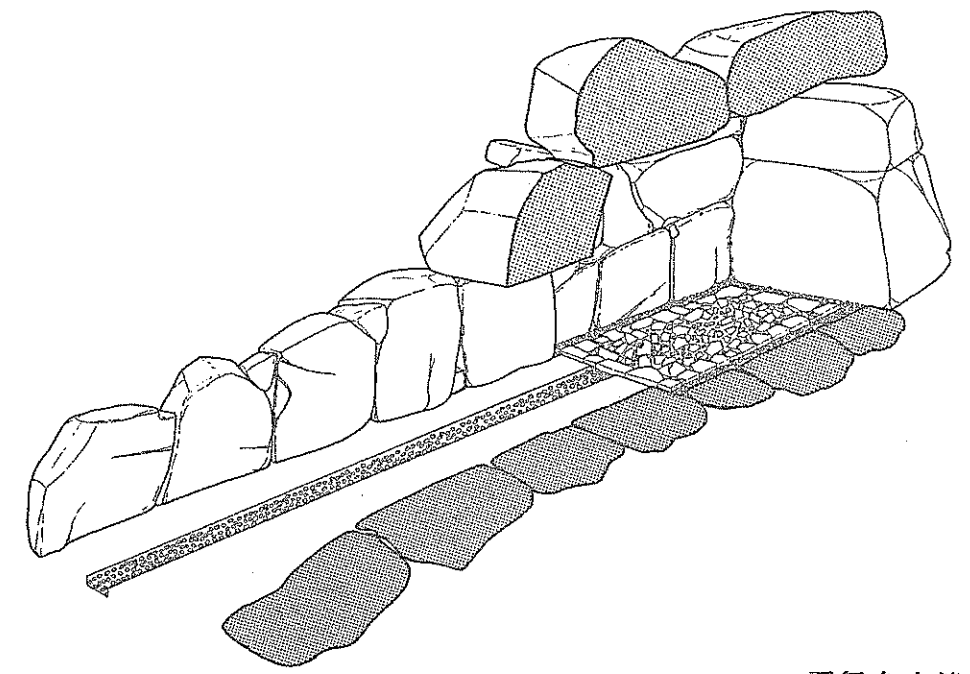
解説 網干善教氏

# 平成11年度 明日香村内遺跡発掘調査一覧

遺跡名	調査回数	所在地	調査期間	調査面積	調査原因
1 雷丘東方遺跡(第8次)	1999-1次	雷176-177-2-178	4/7	27㎡	個人住宅新築
2 川原西垣内遺跡	1999-2次	川原61-1	4/26	14.5㎡	個人住宅新築
3 八鈎・東山古墳群	1999-3次	八鈎・東山地内	5/6~1/19	850㎡	農地区画整理
4 奥山上垣内遺跡	1999-4次	奥山625	5/7~5/14	25㎡	個人住宅新築
5 小原地内遺跡群	1999-5次	小原地内	5/10~5/26	86㎡	公共下水道
6 立部前田遺跡	1999-6次	立部455	5/7	8㎡	個人住宅新築
7 川原堤添遺跡	1999-7次	川原189-1	6/2	6㎡	個人住宅新築
8 小原浦ノ下遺跡	1999-8次	小原209-1-210-1	7/21~7/28	36㎡	農業用倉庫新築
9 飛鳥寺跡	1999-9次	飛鳥地内	9/6~9/21	68.6㎡	公共下水道
10 飛鳥寺跡	1999-10次	飛鳥地内	9/27~11/11	99.6㎡	公共下水道
11 史跡橘寺跡	1999-11次	橘地内	10/8~10/15	56㎡	公共下水道
12 酒船石遺跡(第12次)	1999-12次	岡地内	11/22~3/31	750㎡	道路新設
13 藤原京左京十二条四坊	1999-13次	奥山地内	1/21~1/31	78㎡	道路改良
14 史跡川原寺跡	1999-14次	川原地内	1/28~2/7	69.2㎡	公共下水道
15 藤原京左京八条三坊	1999-15次	小山135-3	2/2	8㎡	個人住宅新築
16 豊浦寺跡	1999-16次	豊浦59	2/24~2/25	21㎡	個人住宅新築



明日香村内主要遺跡地図 (1:20000)



石舞台古墳

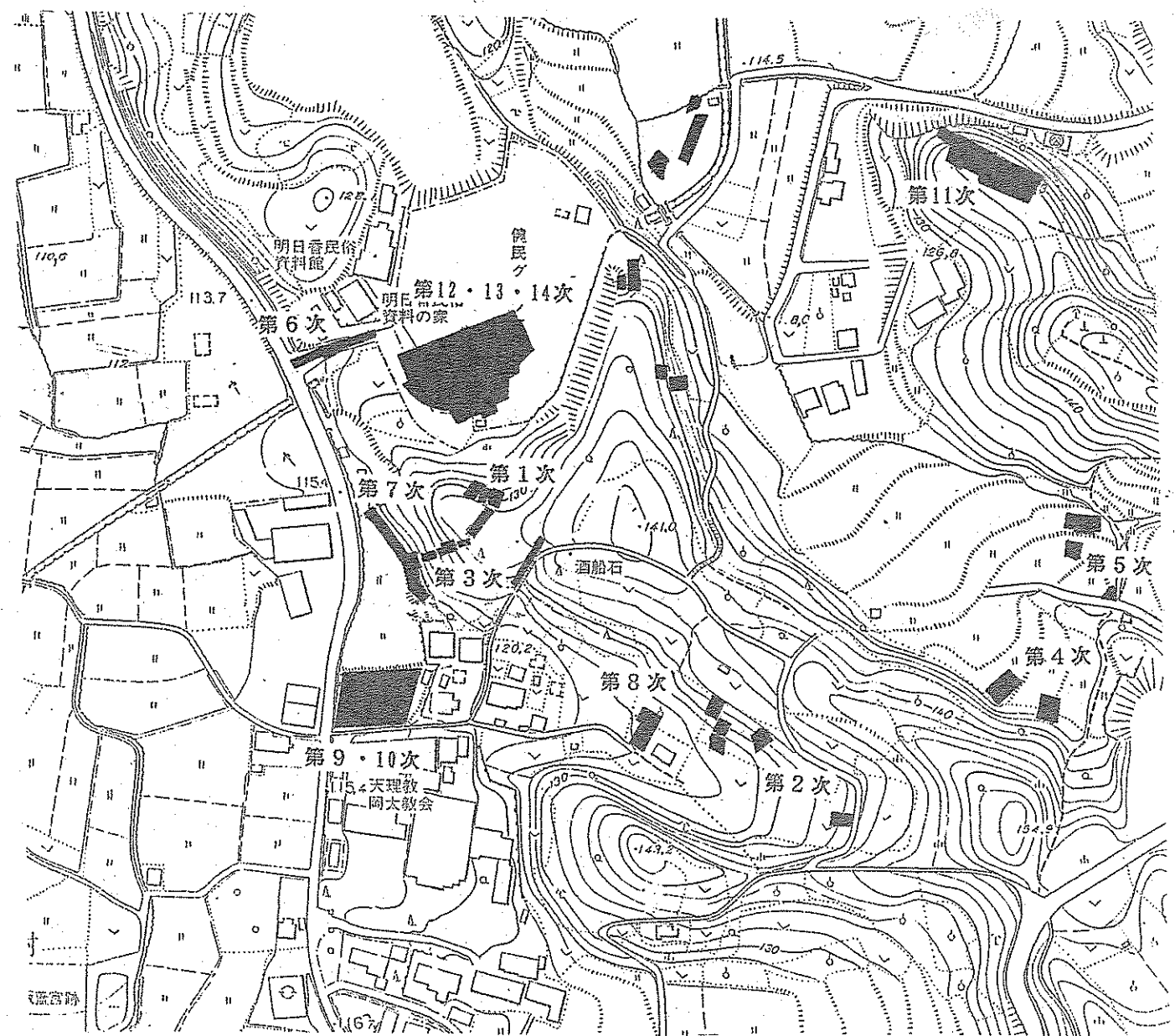
# I. 酒船石遺跡の調査

## 酒船石(遺跡)をめぐる研究史

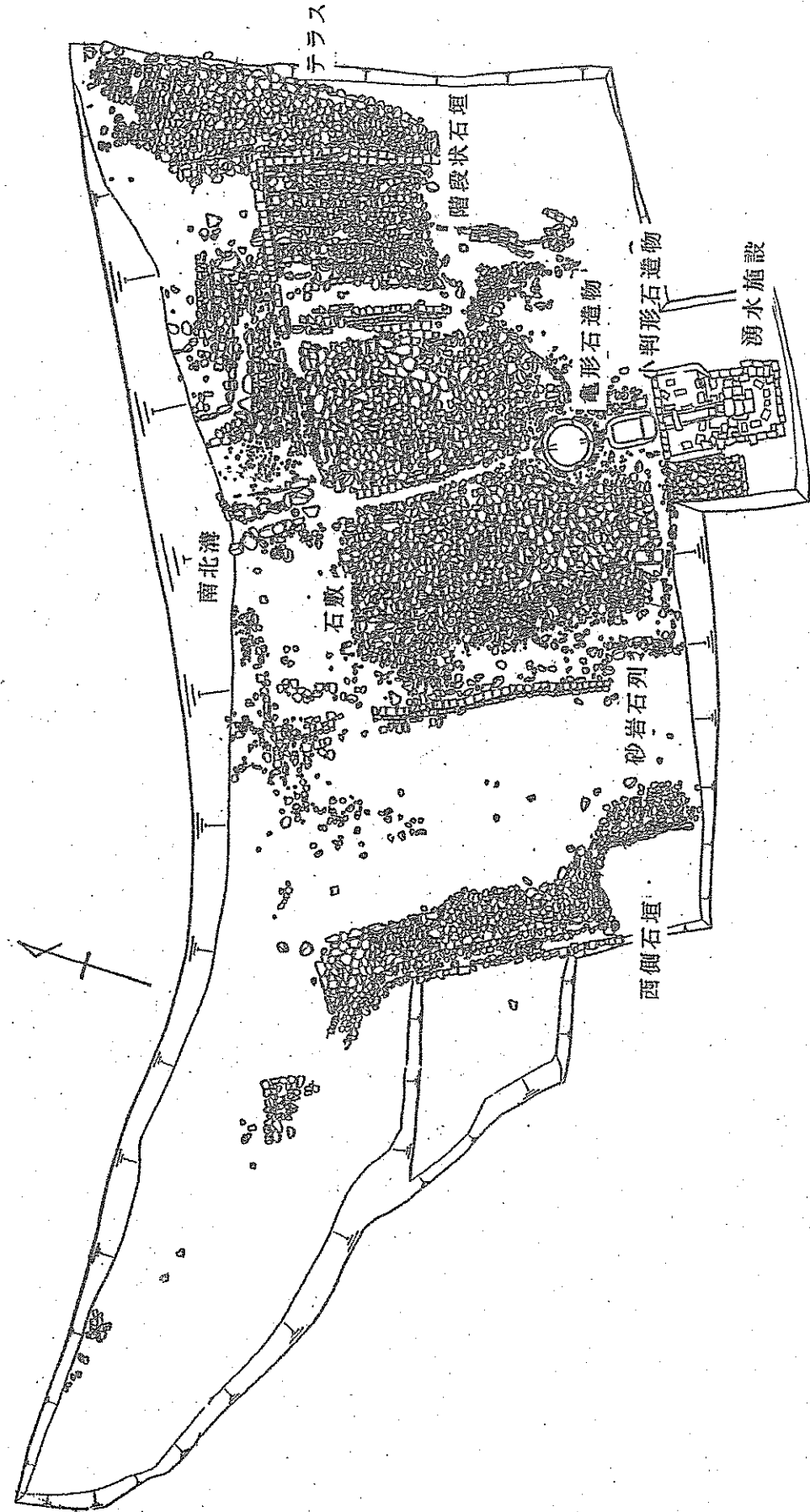
- ・著者不明「古跡略考」(1751)……名称を「酒船石」と呼ぶ。飛鳥社への供する酒作りの石と推定する。記録に見える初出。
- ・本居宣長「菅笠日記」(1772)……「むかしの長者の酒ぶね」と地元の伝承を伝える。両側の破損は高取城築城時に持ち去られたという。
- ・荒木田久老「大和河内旅路の記」(1782)……史跡めぐりの途中に酒船石を見学。飛鳥社の敷地と考える。
- ・上田秋成「岩橋の記」(1788)……猿石・鬼の狙・雪隠などと共に酒船石をまわる。
- ※出水酒船石の発見(1916)……飛鳥川沿いで出水酒船石が一組見つかる。
- ・高橋健自「古墳時代石製模造器具の研究」(1919)……四部分が古墳時代の石製模造品と類似することから醸造関係遺物とみる。
- ※草石の発見(1935)……酒船石の南10mで16個見つかる。
- ・川勝政次郎「歴史時代出土遺物」(1944)……長者の酒ぶね説を紹介し、あわせて岡酒船石と草石から出水酒船石へ至る施設とみる。その性格は燈油製造器とする。
- ・市毛勲「辰砂の精製」(1967)……4～5世紀頃の朱造石とする。
- ・齊藤国治「益田岩船は天文遺跡か」……益田岩船等と関連して、酒船石を日没観測施設とする。
- ・町田章「飛鳥の古墳と石造物」(1980)……岡酒船石と草石とを組み合わせ、山中から清水を引いて、丘陵先端で儀式を行うとする。
- ・猪熊兼勝「酒船石」(1982)……岡・出水酒船石と草石を組み合わせ、飛鳥京跡の東から西へと導水する施設とし、曲水宴の原形とする。
- ・重松明久「酒船石の図像的研究」(1985)……道教施設とする。
- ※明日香村教育委員会「酒船石遺跡(第1次)の調査」(1992年度)……酒船石北西で砂岩石垣の発見
- ・河上邦彦「両槻宮と酒船石北西の石垣について」(1994)……石垣発見に伴い、酒船石遺跡を齊明天皇の両槻宮とし、多武峰をめぐる壮大な山城を復元し、その中に両槻宮殿を推定する。
- ・関西大学地理学教室「両槻宮と古代山城」(1995)……「宮東山の石垣」「両槻宮」とを別のものと推定し、酒船石遺跡を「宮東山の石垣」に比定し、現地踏査を踏まえて、共に山城あるいは山城の離宮と説く。
- ※明日香村教育委員会「酒船石遺跡(第3次)範囲確認調査」(1994年度)……遺跡西面で四重の石垣とその崩壊過程を解明。
- ・亀田博「酒船石は何に使われたか」(1995)……古墳時代の導水施設との比較から五穀豊穡を祈る祭祀場とみる。
- ・門脇禎二「酒船石遺跡と両槻宮」(1996)……酒船石遺跡を齊明朝の両槻宮とし、その性格は社大・豪壮な離宮と説く。
- ※明日香村教育委員会「酒船石遺跡(第9・10次)調査」(1996・1997年度)……遺跡西側水田より、天武朝の庇付大型建物と石敷を発見。
- ・猪熊兼勝「短命だった両槻宮」(1997)……第9・10次調査の大型建物を新造の両槻宮とみる。
- ・亀田博「酒船石遺跡は神籠石か」(1998)……「田身嶺の周垣」と「宮の東の石垣」を別のものと考え、後者を酒船石遺跡とし、前者を未発見の山城とみる。
- ※明日香村教育委員会「酒船石遺跡(第12次)調査」(1999年度)……遺跡北縁で亀形石造物をはじめ、石敷・石垣が発見される。

### これまでの調査

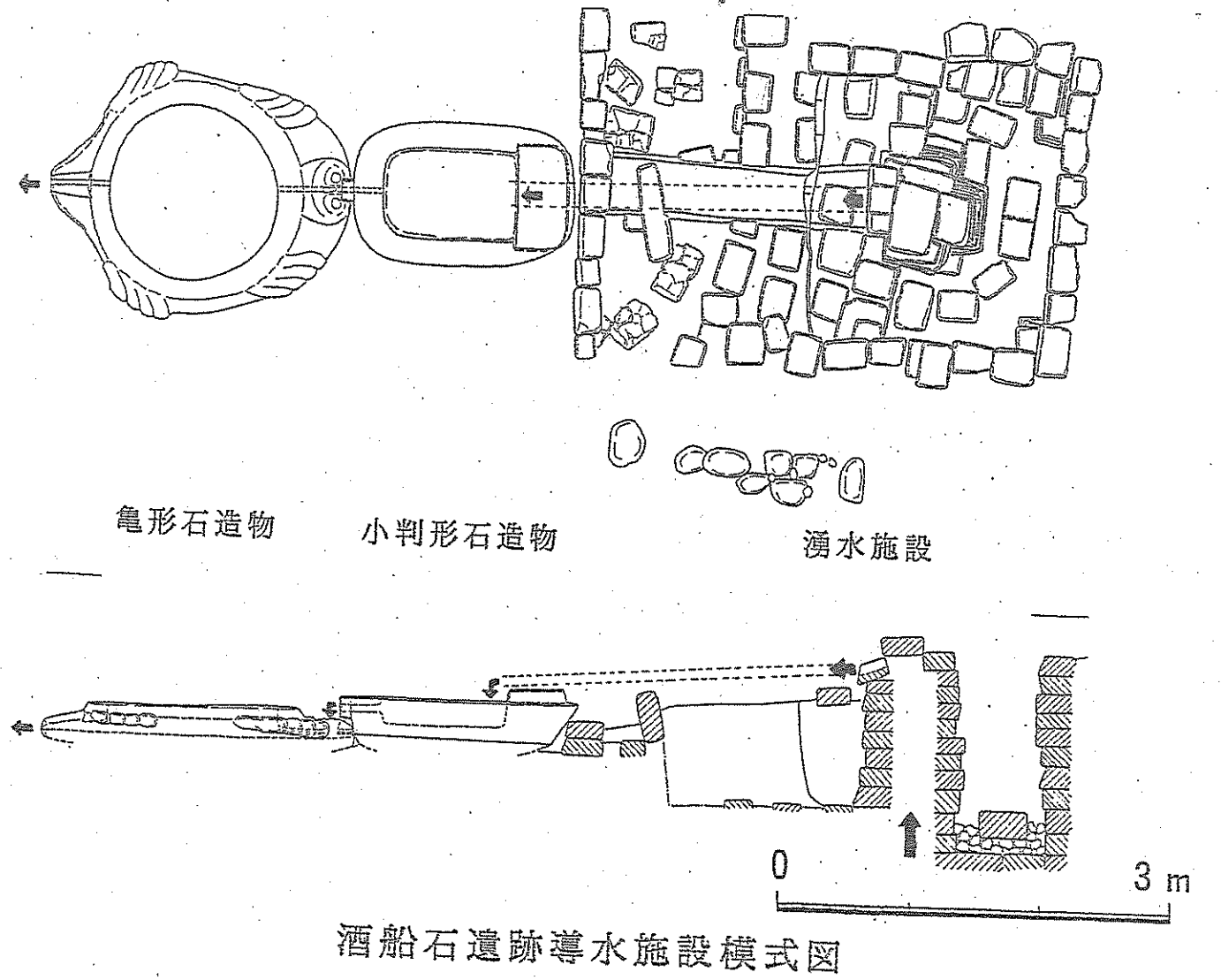
- 第1次(1992) 酒船石の北西斜面で大規模な造成(版築)と砂岩石垣を検出。
- 第2次(1993) 酒船石が所在する丘陵で版築の範囲確認調査を実施する。
- 第3次(1994) 丘陵西側で4重の石垣と、石敷を検出。
- 第4次(1994) 丘陵北東側で建物跡と丘陵を取り巻く河川跡を検出。
- 第5次(1994) 遺構・遺物なし。
- 第6次(1995) 砂岩片を含む堆積土を確認。
- 第7次(1995) 砂岩石敷と花崗岩石垣石材を投棄した中世河川の検出。
- 第8次(1996) 砂岩石垣の倒壊した跡とバラス敷を検出。
- 第9次(1996) 石敷と南北溝を検出。
- 第10次(1996) 天武朝の三面庇付大型建物と谷の堆積土を検出。
- 第11次(1998) 丘陵上部で欄列、谷部分で水路跡を検出。
- 第12次(1999) 石造物を中心とした導水施設と周辺の石敷等を検出。
- 第13次(2000) 石造物の南側で砂岩で造った湧水施設を検出。
- 第14次(2000) 第12次調査の続きの石段と南北溝等を検出。



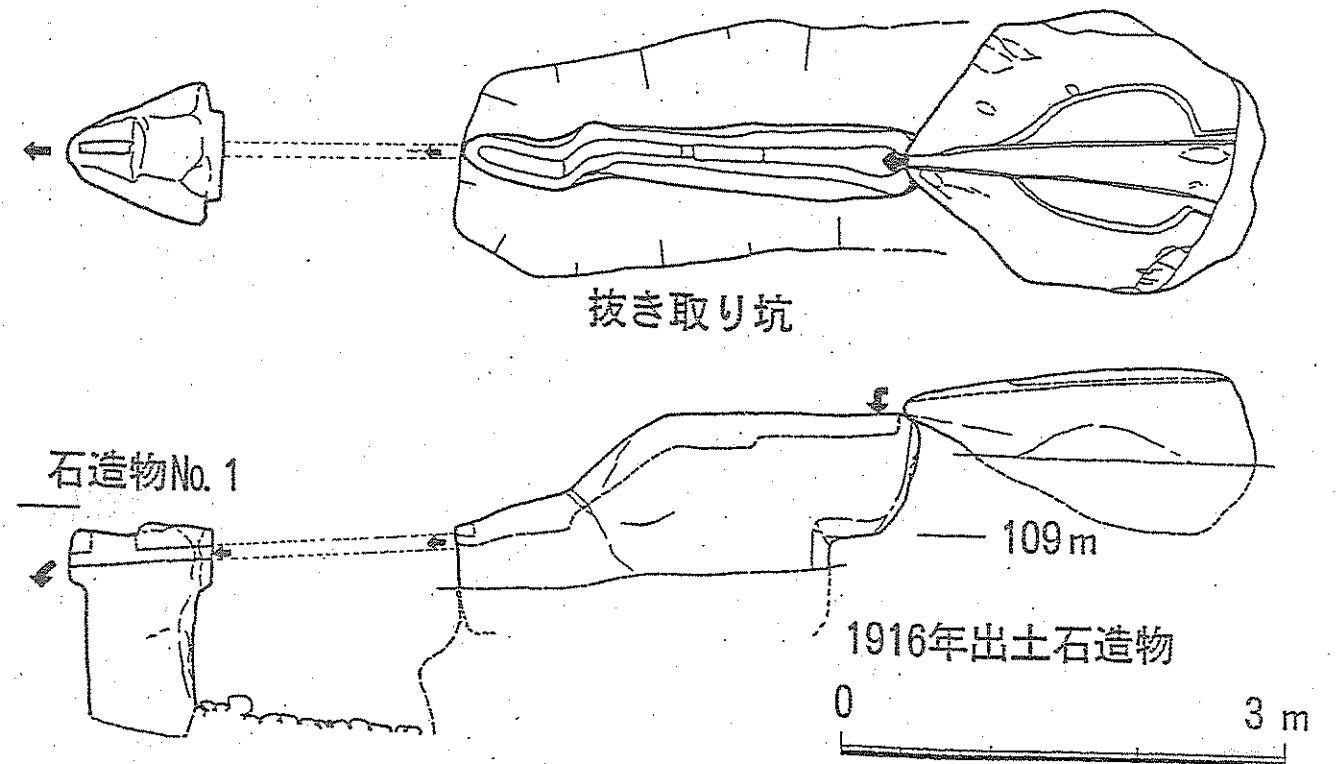
酒船石遺跡調査位置図



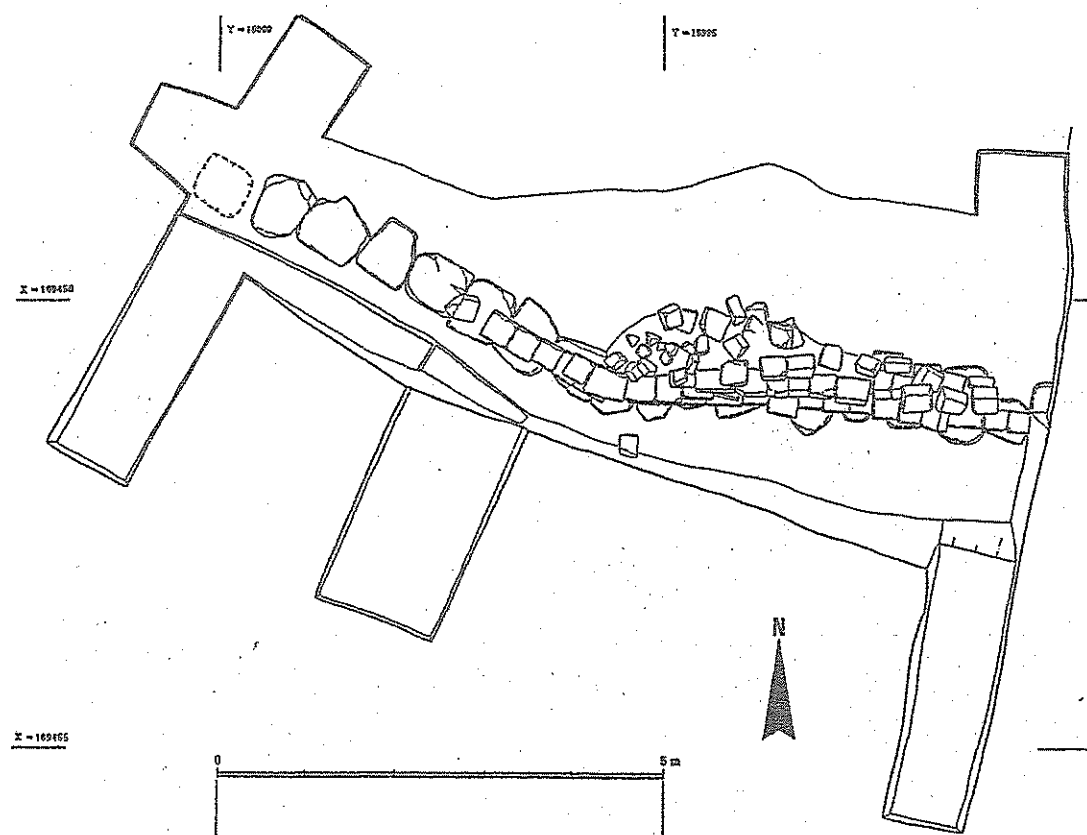
酒船石遺跡第12・13次調査平面図



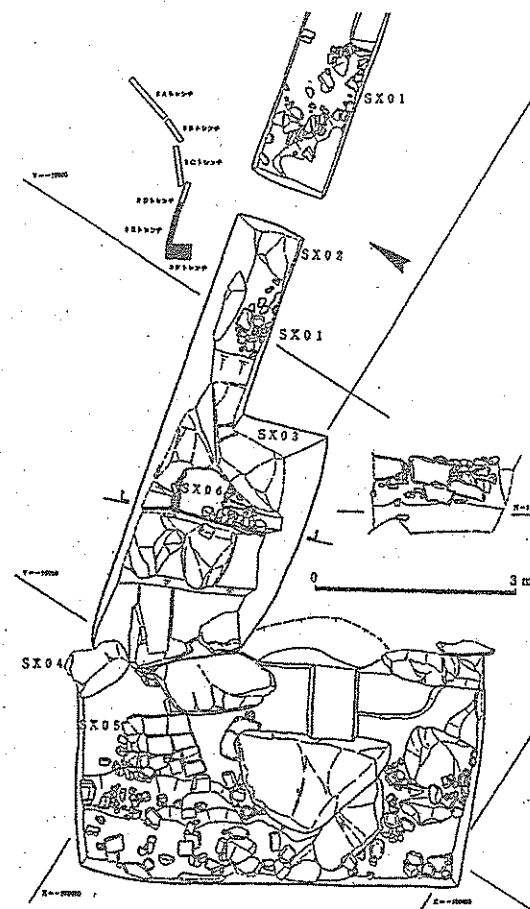
酒船石遺跡導水施設模式図



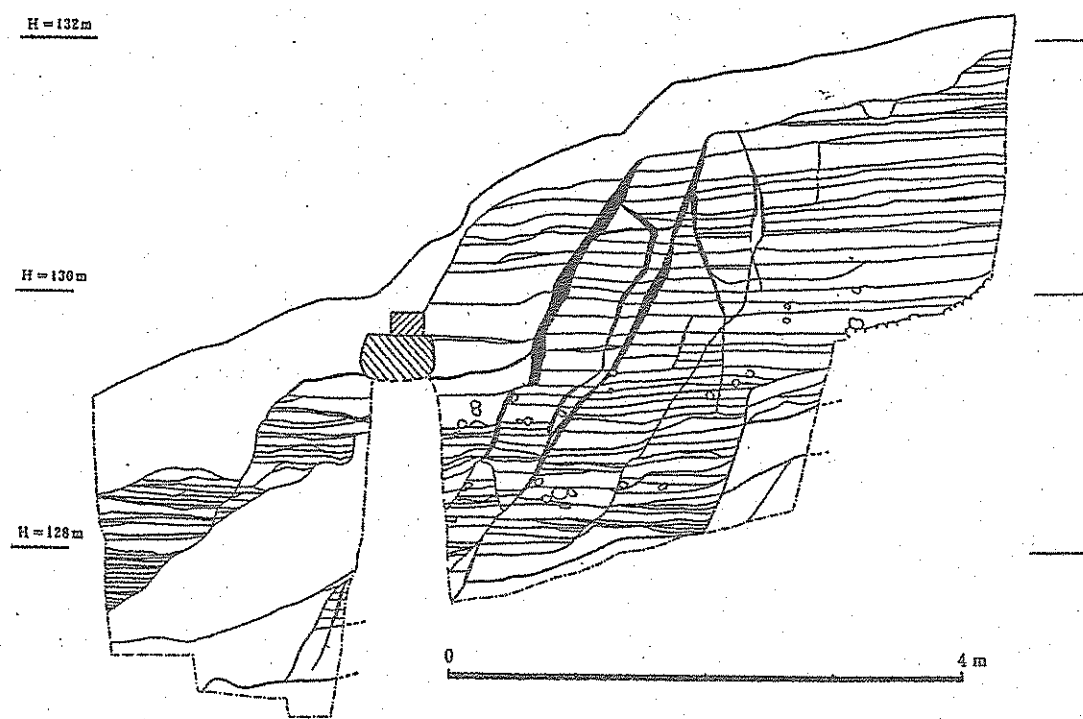
石造物の組み合わせ想定図



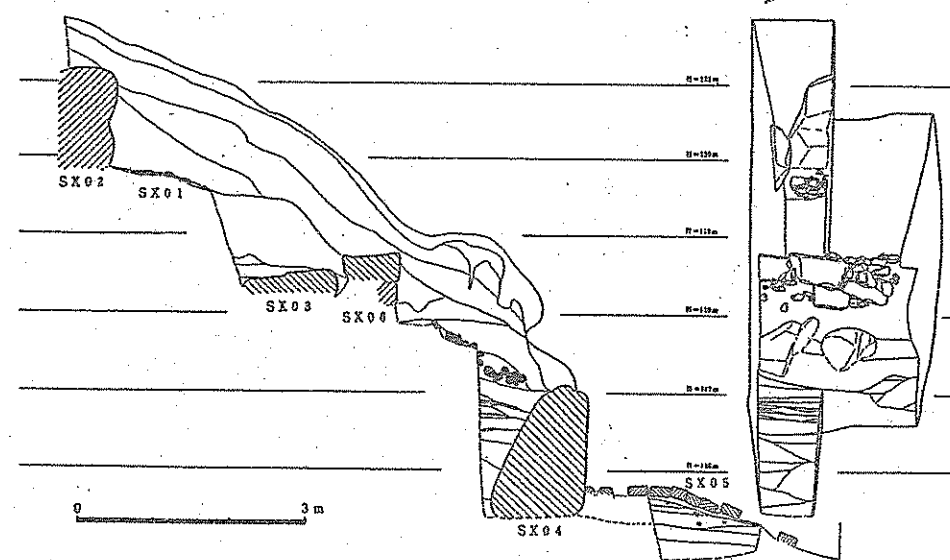
酒船石遺跡第1次調査平面図



酒船石遺跡第3次調査平面図



酒船石遺跡第1次調査土層断面図



酒船石遺跡第3次調査土層堆積状況図

齊明2年(656)是歳【日本書紀】

(前略) 田身嶺に、冠らしむるに周れる垣を以てす。田身は山の名なり。此をば大務と云ふ。復、嶺の上の兩つの槻の樹の邊に、觀を起つ。號けて兩槻宮とす。亦是は天宮と曰ふ。時に興事を好む。廻ち水工をして渠穿らしむ。香山の西より、石上山に至る。舟二百隻を以て、石上山の石を載みて、流の順に控引き、宮の東の山に石を累ねて垣とす。時の人誇りて曰はく、「狂心の渠。功夫を損し費すこと、三萬余。垣造る功夫を費し損すこと、七萬余。宮材爛れ、山椒埋れたり」といふ。又、誇りて曰く、「石の山丘を作る。作る隨に自づからに破れなむ」といふ。若しは未だ成らざる時に據りて、此の跡を作せるか。

齊明4年(658)11月壬午(3日)【日本書紀】

留守官蘇我赤兄臣、有馬皇子に語りて曰はく、「天皇の治らす政事、三つの失有り。大きに倉庫を起てて、民財を積み聚むること、一つ。長く渠水を穿りて、公糧を損し費すこと、二つ。舟に石を載みて、運び積みて丘にすること、三つ。」といふ。

天武4年(675)11月癸卯(3日)【日本書紀】

人有りて宮の東の岳に登りて、妖言して自ら刎ねて死ぬ。

持統7年(693)9月辛卯(5日)【日本書紀】

多武嶺に幸す。

持統10年(696)3月乙巳(3日)【日本書紀】

二槻宮に幸す。

大宝2年(702)3月甲申(17日)【続日本紀】文武天皇

大倭國をして二槻離宮を繕治はしむ。

古跡略考

著者不明  
宝曆元年(1751)

岡村

むかし八岡町といふ。岡本宮跡・遊回の岡此所也。

(中略)

酒船石 一酒船石 長二間横五尺三寸。飛鳥由来記ニハ酒谷山、鳥形山の南半町、山の峰に大石有。濁酒を盛 上に大壺を掘、これより溝あり、上の壺ニ濁酒を盛て下へ流し、清して神酒となし飛鳥社へ供ふ。これ和國か清酒の始なりといふ。

(中略)

立石 一立石といふ物觀音山松林の北はつれにミゆ。高八尺余、いはれしらす。

(中略)

祝戸村 此村ハ中古、鳴庄・坂田・稲淵・橋四ヶ村の分高の村也。

(中略)

立石 一立石 此石鳥居の柱のこき物也。顯はるる処四尺ばかり、土に入処長不知といふ。さばかりの事も有ましきなり。此石傾けは作毛不熟すといひ、これ下つ村々これを頼みて起したる事近年なり。

陰囊石 一陰囊石 名のこき、大体丸き石二ツ重りたり。上なる石動き、いかにもこきやうの物なり。

著者不明。飛鳥地方の村々を实地に調査し、村々の社寺の規模・沿革・口碑・現状を詳細に記述している。「大和名所記」を随所に引用している。池田末則氏は、長泉福「大和名所

和歌集」の頭註の筆跡に酷似する点が多く見られることから、同筆者かと推定している。「大和名所記・飛鳥古跡考」奈良県史料第1巻 1977

菅笠日記

本居宣長

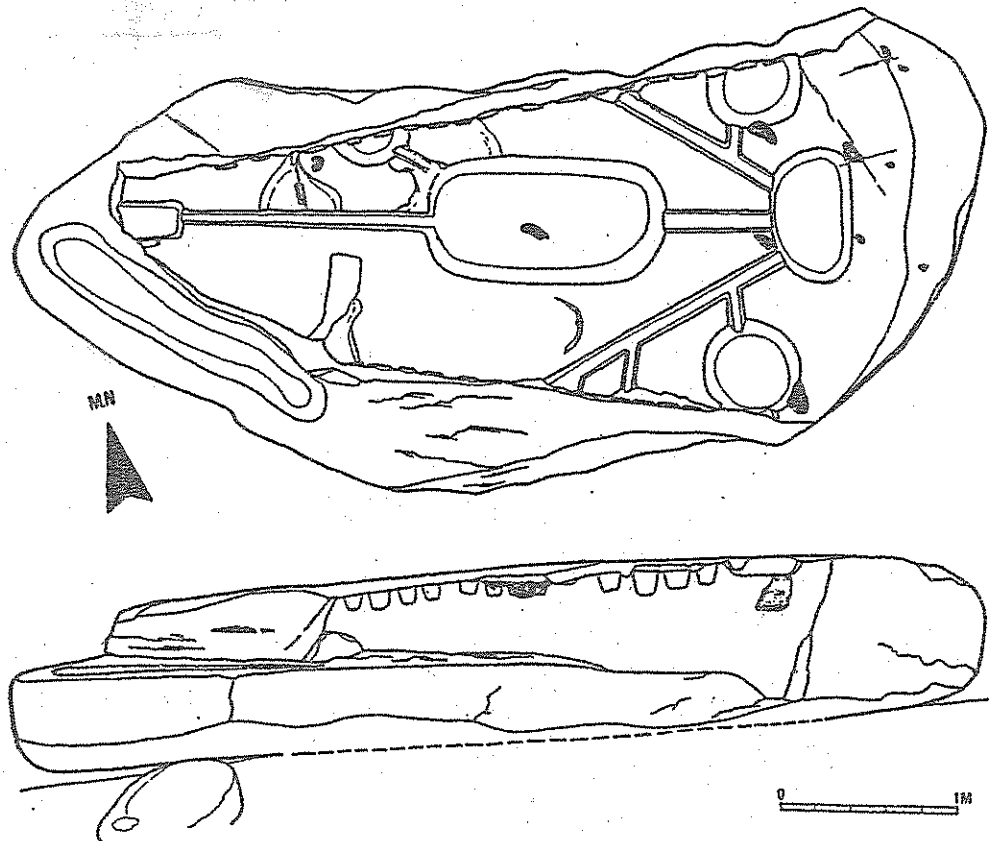
明和9年(1772)

又岡の里にかへり。三四町ばかりも北へはなれゆきて。右の方の高きところへ。一丁ばかりのぼりたる野中に。あやしき酒船石あり。長さ一丈二三尺。よこはひろき所七尺ばかりにて。硯をおきたらんようして。いとたいらなる。中の程に。まろに長く乗りたる所あり。五六寸ばかりのふかさにて。庭もたひらなり。又そのかしらといふべきかたに。同じさまにちひさくまろに乗りたる所三ツある。中なるは中に大きにて。はしなる二ツは。又ちひさし。さてそのかしらの方の中に乗りたる所より。下さまへほそきみぞを三すぢ乗りたる。中なるは。かの広く乗りたる所へ。たださまにつづきて又石の下といふべき方のはし迄とほり。はしなる二すぢは。ななめに下りて。石の左り右のはしへ通り。又そのはしなるみぞに。おのおの枝ありて。左り右にちひさく乗れる所へもかよはしたり。かくて大かたの石のなりは。四すみいづこともかどなくまるにて。かしらのかたひろく。下はややほそれり。そもそも此石。いづれの世にいかなるよしにて。かくつくれるにか。いと心得がたき物のさまなり。里人はむかしの長者の酒ぶねといひつたへてこのわたりの鳥の名をも。やがてさかぶねといふとかや。此石むかしは猶大きなりしを。高取の城きつきしをりに。かたはらをば。おほくかきとりもていにしとぞ。

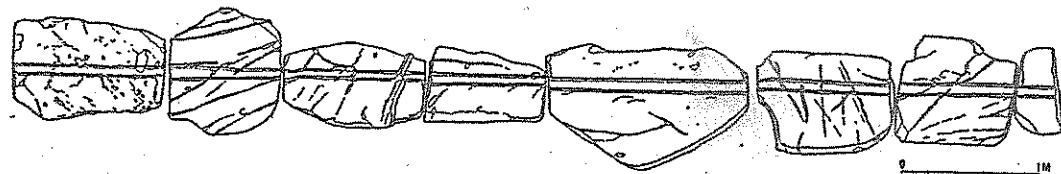
吉野花見の紀行文。明和9年(1772)3月5日伊勢を出て、同月中旬に帰着するまでの記録。酒船石を訪れたのは、吉野からの帰途、3月11日である。

本居宣長(1730~1801)は、伊勢松阪に生れ

る。国学者。賀茂真淵に師事し、契沖の文学、真淵の古道学を承けて更にこれを前進させ、国学を大成した。「古事記伝」「玉勝間」などの著作が有名である。



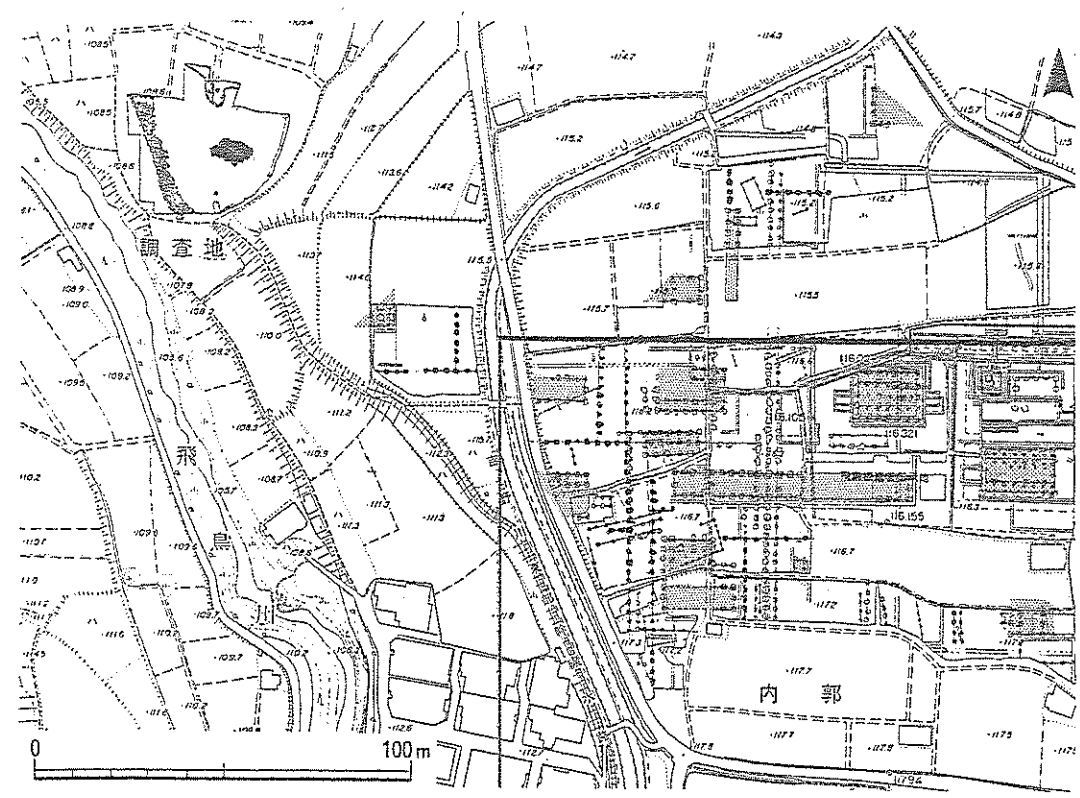
岡の酒船石



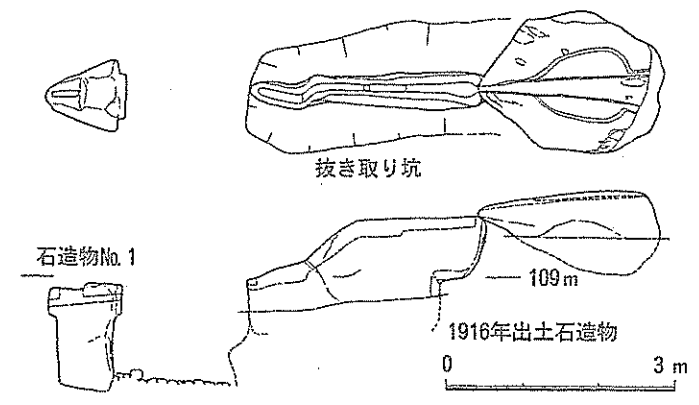
車石



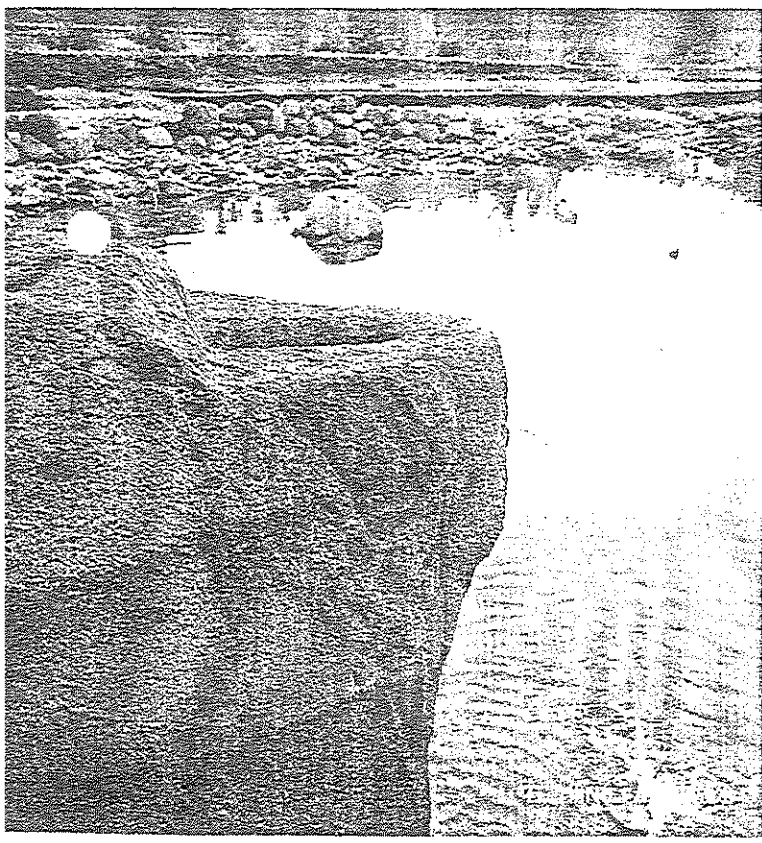
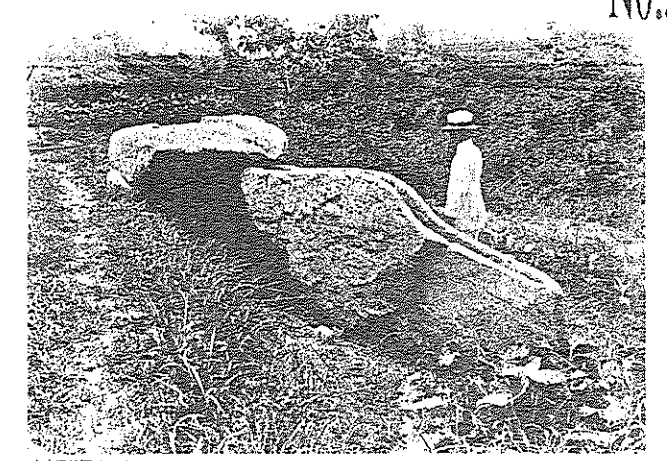
# 飛鳥京跡苑池遺構



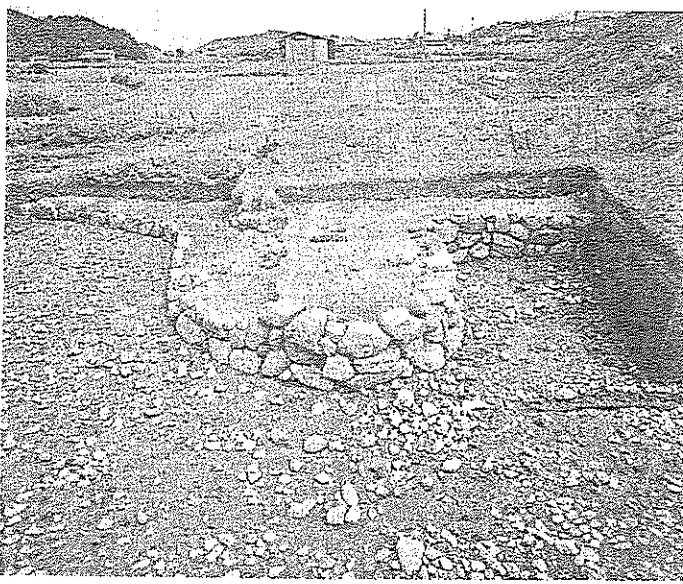
飛鳥京跡上層遺構と調査地との位置関係 (1/2,000)



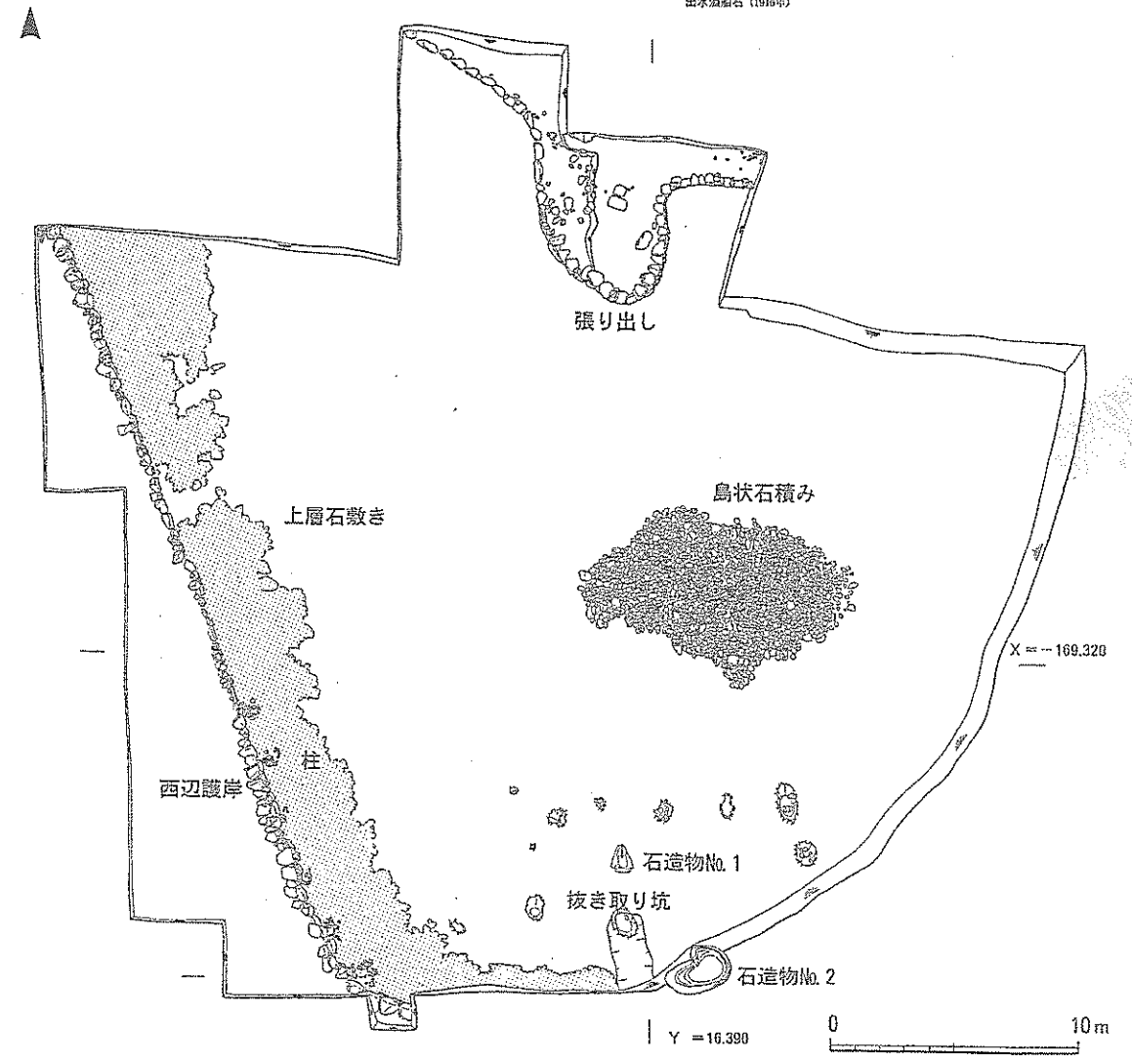
石造物の組み合わせ想定図  
(1916年出土品は飛鳥資料館『飛鳥の石造物』による)



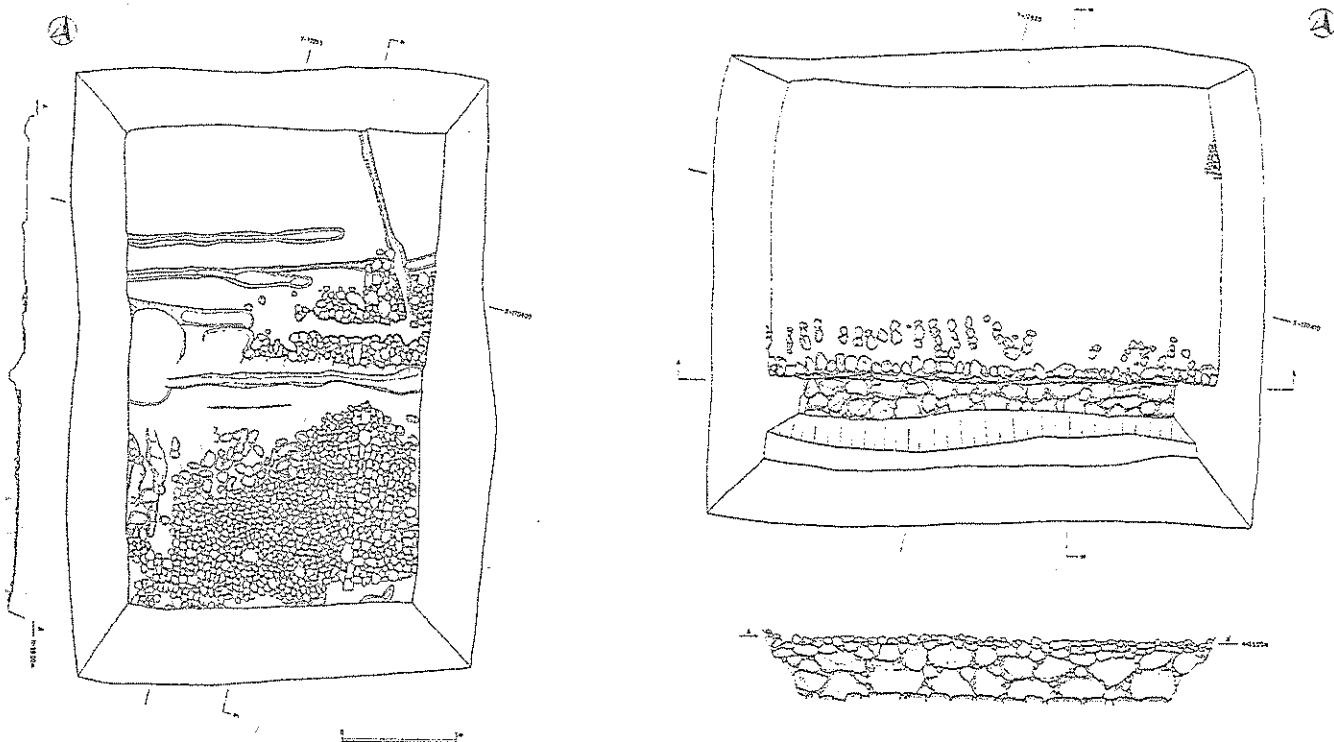
島状石積み



張り出し



苑池遺構平面図 (1/300)

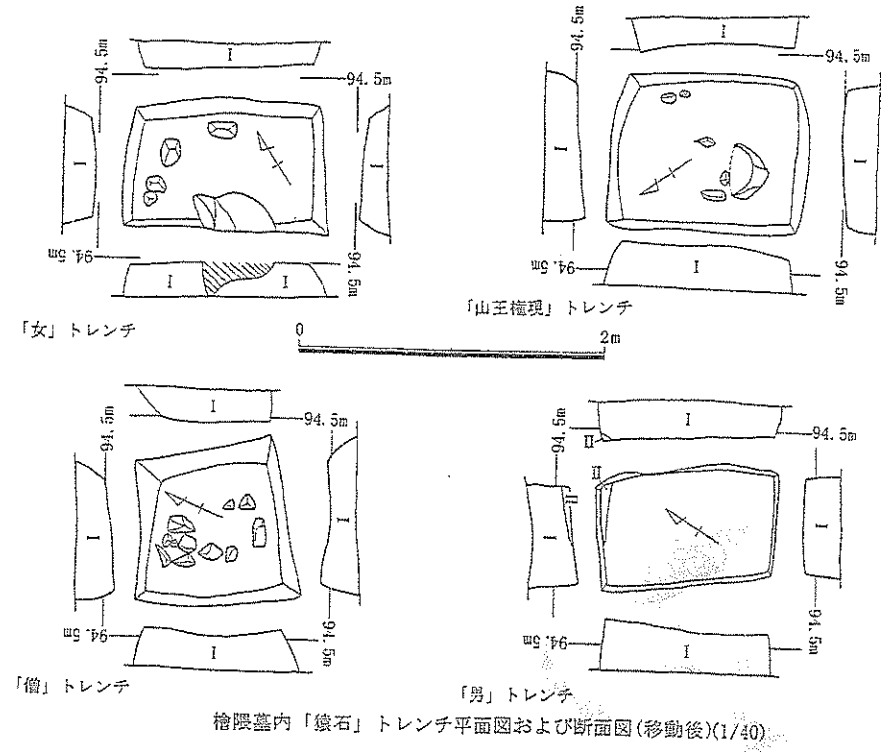


平田キタガワ遺跡第1次調査発掘状況図

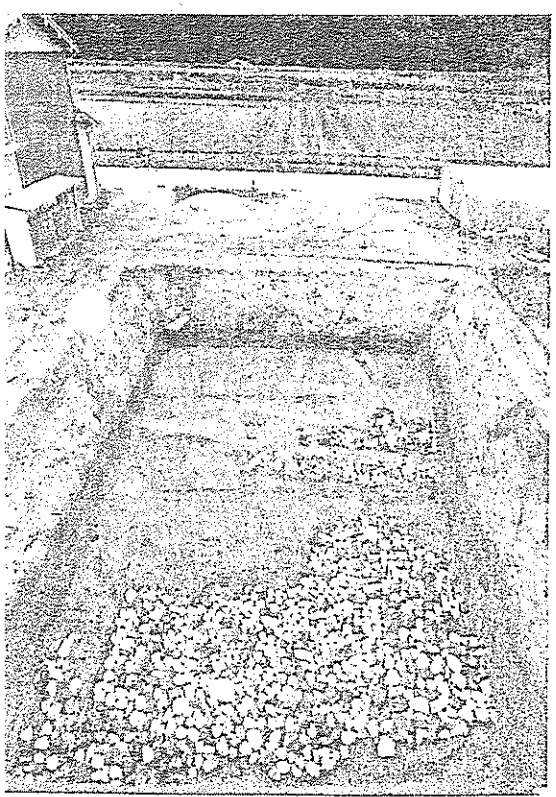
平田キタガワ遺跡第2次調査発掘状況図



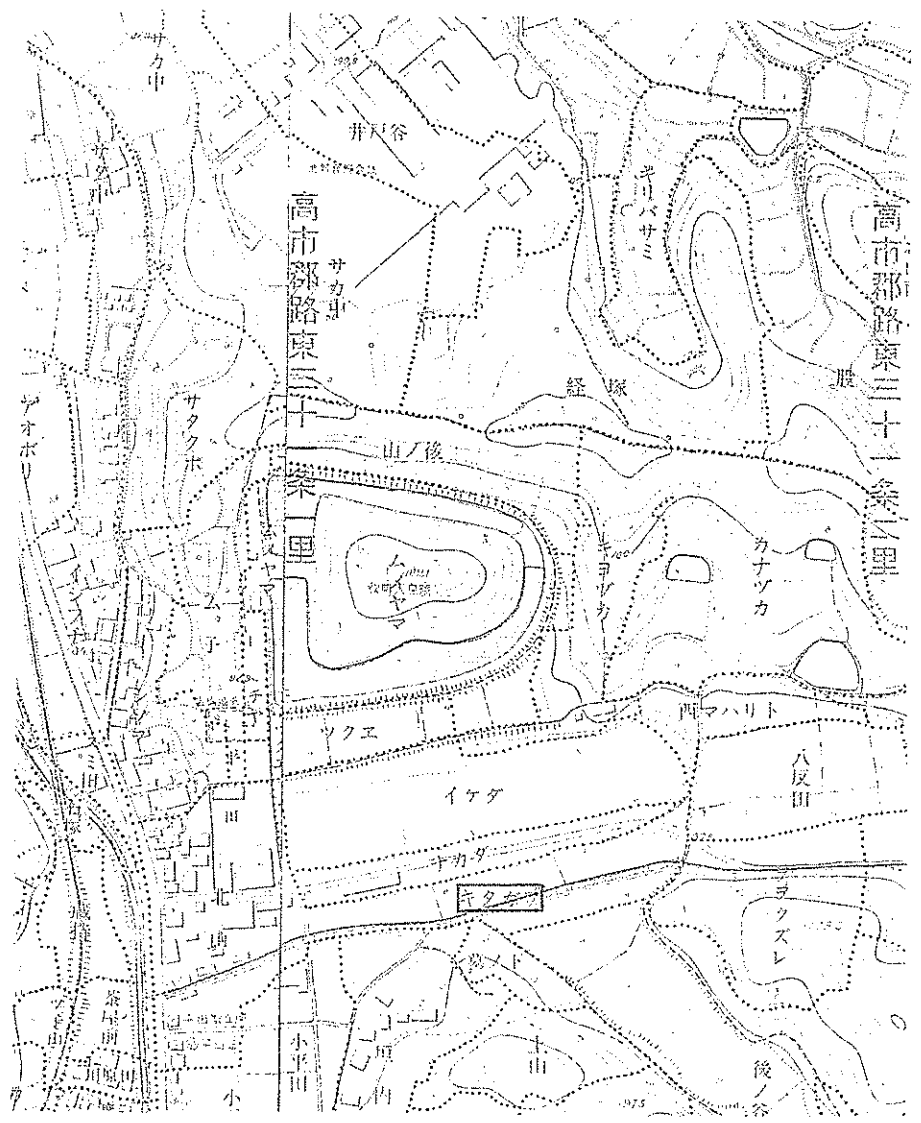
検閲墓内「猿石」のうち「山王権現」



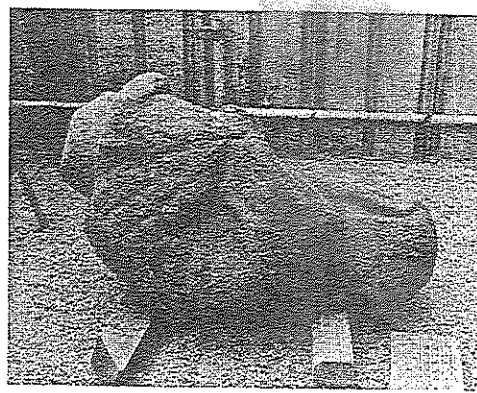
検閲墓内「猿石」トレンチ平面図および断面図(移動後)(1/40)



全貌(南から)



検閲墓内「猿石」のうち「女」



検閲墓内「猿石」のうち「僧」左側面(保存処理作業中)



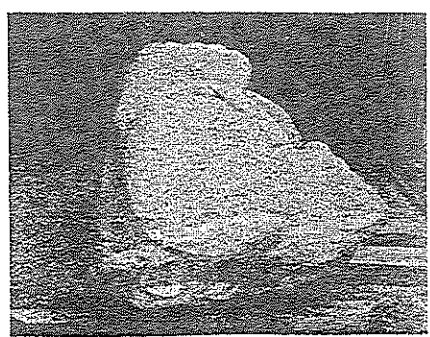
検閲墓内「猿石」のうち「僧」正面下部(保存処理作業中)



検閲墓内「猿石」のうち「僧」



検閲墓内「猿石」のうち「男」



検閲墓内「猿石」のうち「僧」底部(保存処理作業中)

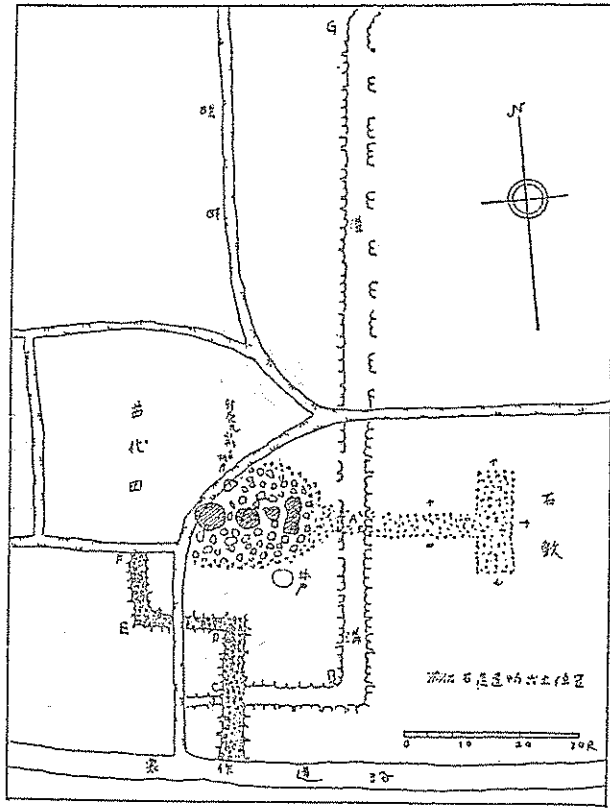
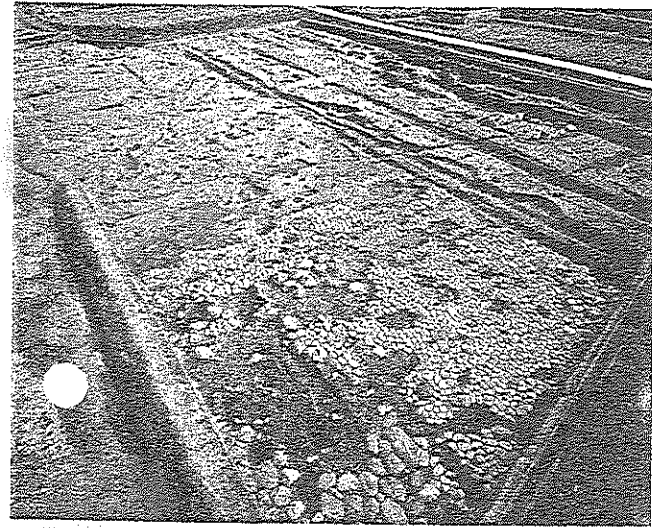
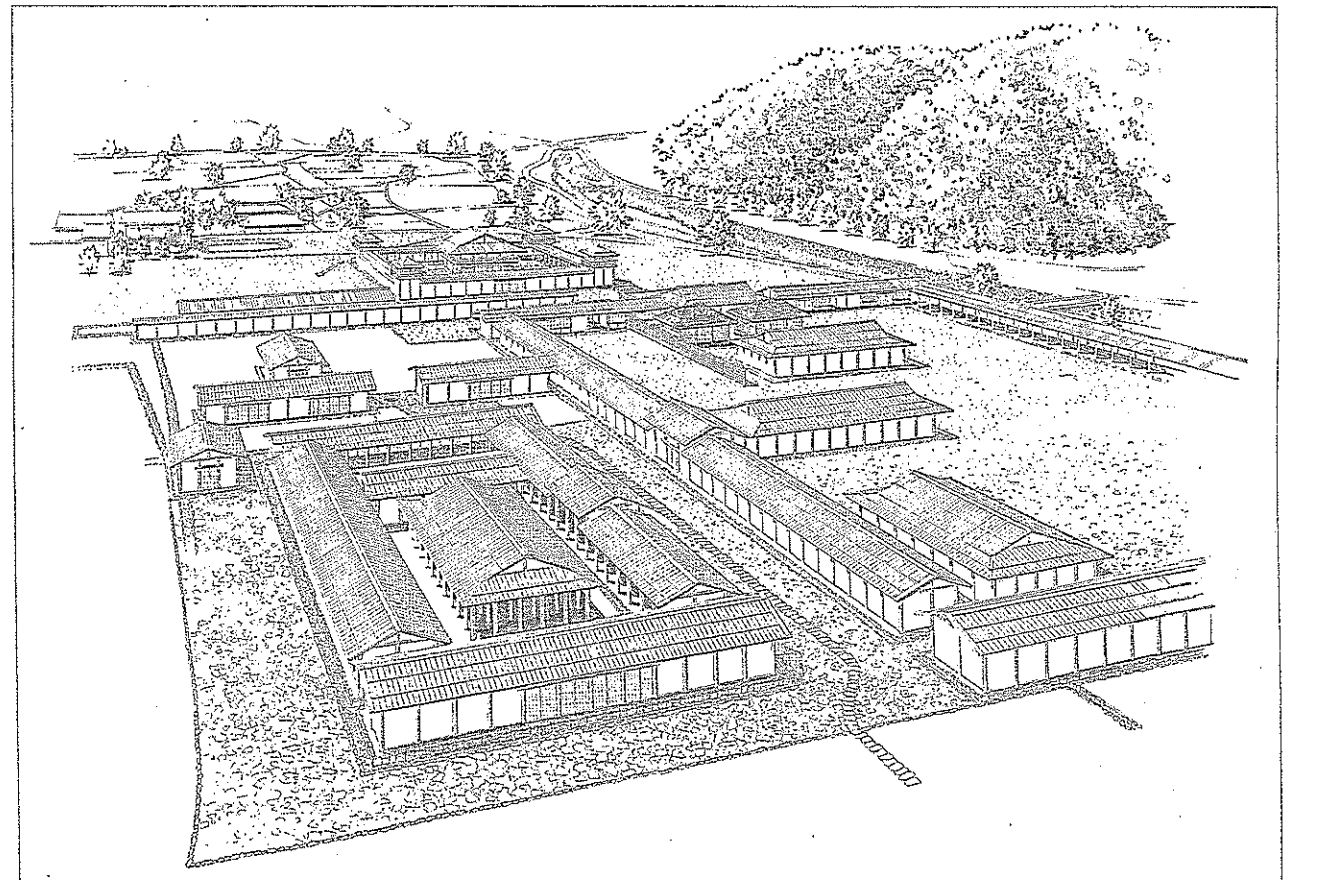
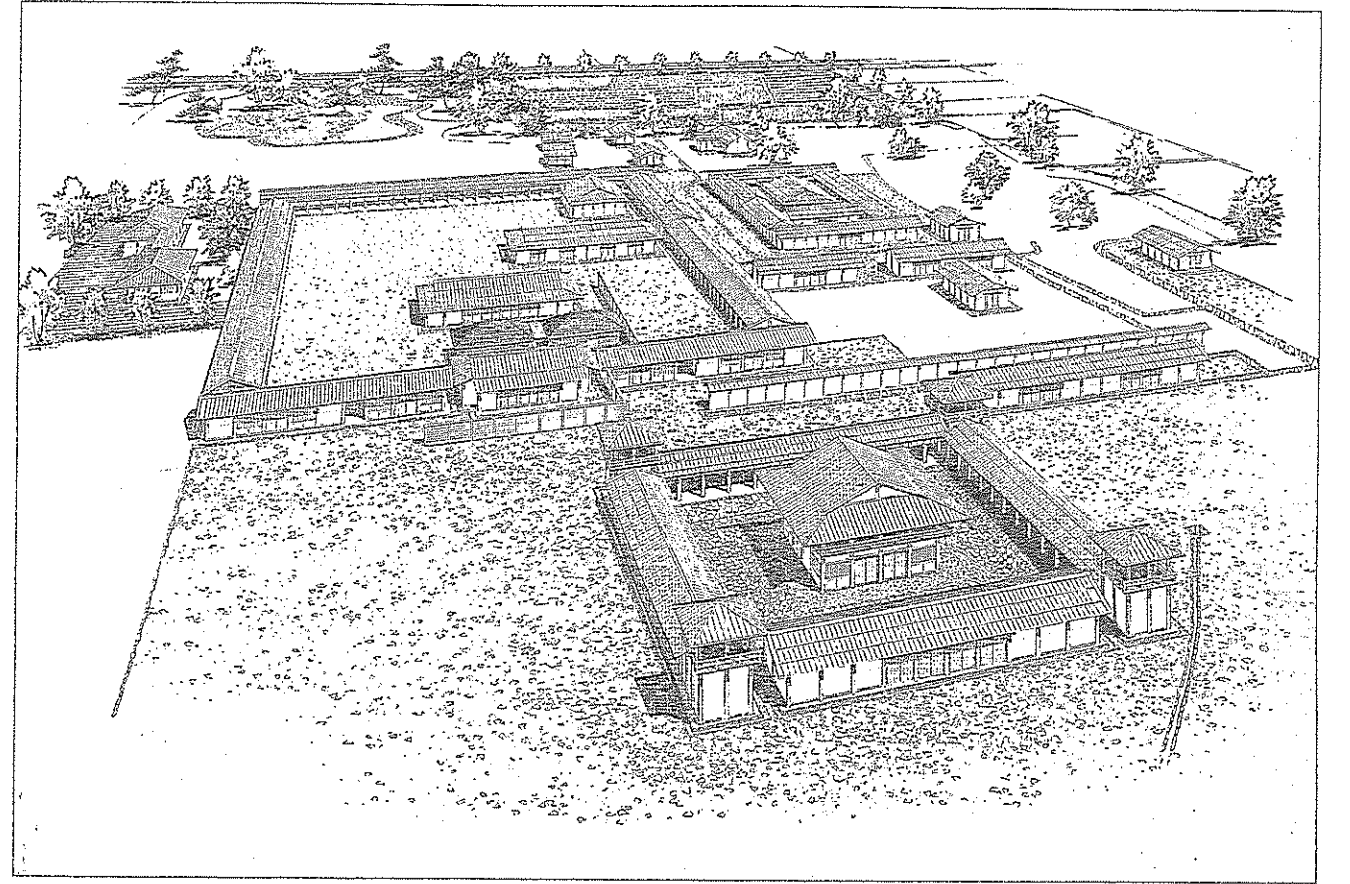


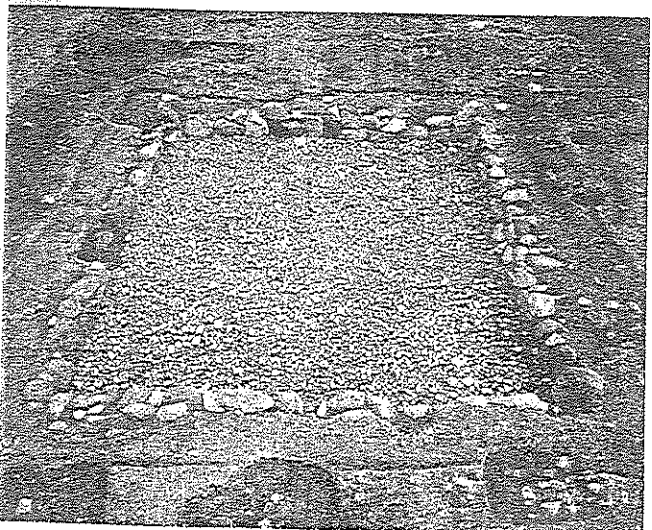
图1 須弥山石出土地 石田茂作 飛鳥随想 学生社より転載



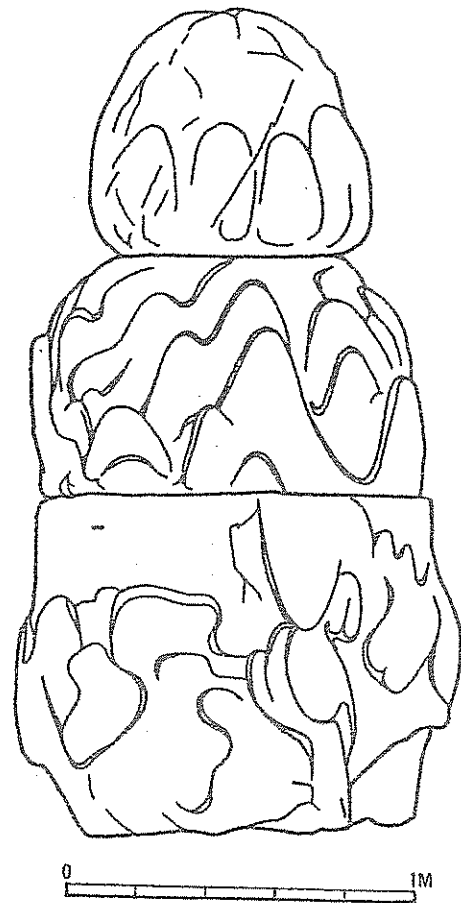
石人像



石神遺跡の石敷き広場



石神遺跡の方形池



須弥山石

## 八鈎・東山古墳群（1999-3次）の調査

明日香村教育委員会

調査地 奈良県高市郡明日香村八鈎・東山地内

調査面積 約850㎡

調査期間 平成11年5月6日～平成12年1月19日

調査目的 農地整備に伴う事前調査

## 1. はじめに

八鈎・東山の地域は、古くは『日本書紀』によると顕宗天皇（弘計皇子）の近飛鳥八鈎宮が置かれた地域とされている。その後、飛鳥時代には矢鈎山周辺に天武天皇の皇子である新田部皇子の邸宅があったことが『万葉集』から知られる。近年の調査でも東山・小原地内での部分的な発掘調査で、飛鳥時代の邸宅跡がみついている。一方、調査前の踏査によると古墳の存在が想定される地形がみられ、東方には金鳥塚や高家古墳群が存在することから、この地域でも古墳の存在する可能性が想定された。これらのことから今回の調査でも飛鳥時代の邸宅跡と古墳の確認を主目的とし、工事削平予定地を中心に調査を行った。

## 2. 調査の概要

今回の調査では尾根の頂部を中心に、8区の調査区を設定して行った。調査の結果、1～3区と8区において、古墳6基と掘立柱塀などを検出した。以下に、簡略に遺構の概要を記す。

## 八鈎マキト1号墳

形態・片袖式横穴式石室

規模・直径18mの円墳

玄室長：350cm 玄室幅：160cm 羨道長：不明 羨道幅：110cm

時期・6世紀中頃

遺物・土器：須恵器（杯・高杯・器台・子持蓋）

装身具：耳環（金環）4点・ガラス小玉150点・銀製中空玉10点・滑石製玉4点

副葬品：馬具（雲珠・鞍金具・責金具・兵庫鎖等）・刀子

その他：鉄釘

備考・石室床面に拳大の石を敷く 閉塞石がよく残る

## 八鈎マキト2号墳

形態・片袖式横穴式石室

規模・直径18mの円墳

玄室長：330cm 玄室幅：175cm 羨道長：不明 羨道幅：不明

時期・6世紀後半

遺物・土器：須恵器（杯・高杯・長頸壺）

副葬品：刀子

備考・石室床面に人頭大の石を敷く 玄室南半と羨道は残っていない

## 八鈎マキト3号墳

形態・片袖式横穴式石室

規模・直径7mの円墳

玄室長：200cm 玄室幅：120cm 羨道長：不明 羨道幅：95cm

時期・7世紀初頭

遺物・土器：須恵器（杯）・土師器（椀B・長頸壺）

装身具：耳環（金環）2点

その他：鉄釘

備考・羨道部未調査 石室床面に棺台がある

## 八鈎マキト4号墳

形態・竪穴系小石室

規模・石室長：75cm 石室幅：55cm

時期・7世紀前半

遺物・土器：須恵器（杯）

## 八鈎マキト5号墳

形態・両袖式横穴式石室

規模・直径20mの円墳

玄室長：400cm 玄室幅：220cm 羨道長：600cm 羨道幅：130cm

時期・6世紀後半

遺物・土器：須恵器（杯・高杯・耳皿・器台）・土師器（椀）

副葬品：馬具（雲珠・辻金具・鞍金具・等）・刀子・

その他：鉄釘

備考・石室床面に棺台がある 閉塞石がよく残る

## 東山紋方鼻古墳

形態・横穴式石室

規模・直径20mの円墳

玄室長：不明 玄室幅：不明 羨道長：不明 羨道幅：不明

時期・不明

遺物・なし

備考・石室石材はすべて抜き取られている

## 掘立柱塀

マキト1号墳と5号墳の間の尾根鞍部で、一辺1mの柱穴を16個検出した。柱間は8尺等間の掘立柱塀で、尾根稜線に沿って作られている。7世紀後半のものと推定される。

3. まとめ

今回の調査では5基の横穴式石室墳と1基の竪穴系小石室墳、さらに掘立柱塀を検出した。これらの古墳は東方に存在する高家古墳群とは立地が異なり、その間には古墳の確認されていない空白地帯が存在することから、同一古墳群とは現状では言いがたい。今回の調査地以外にも未発見の古墳が存在するものと推定されることから、金鳥塚を含めて「八釣・東山古墳群」と総称することにする。

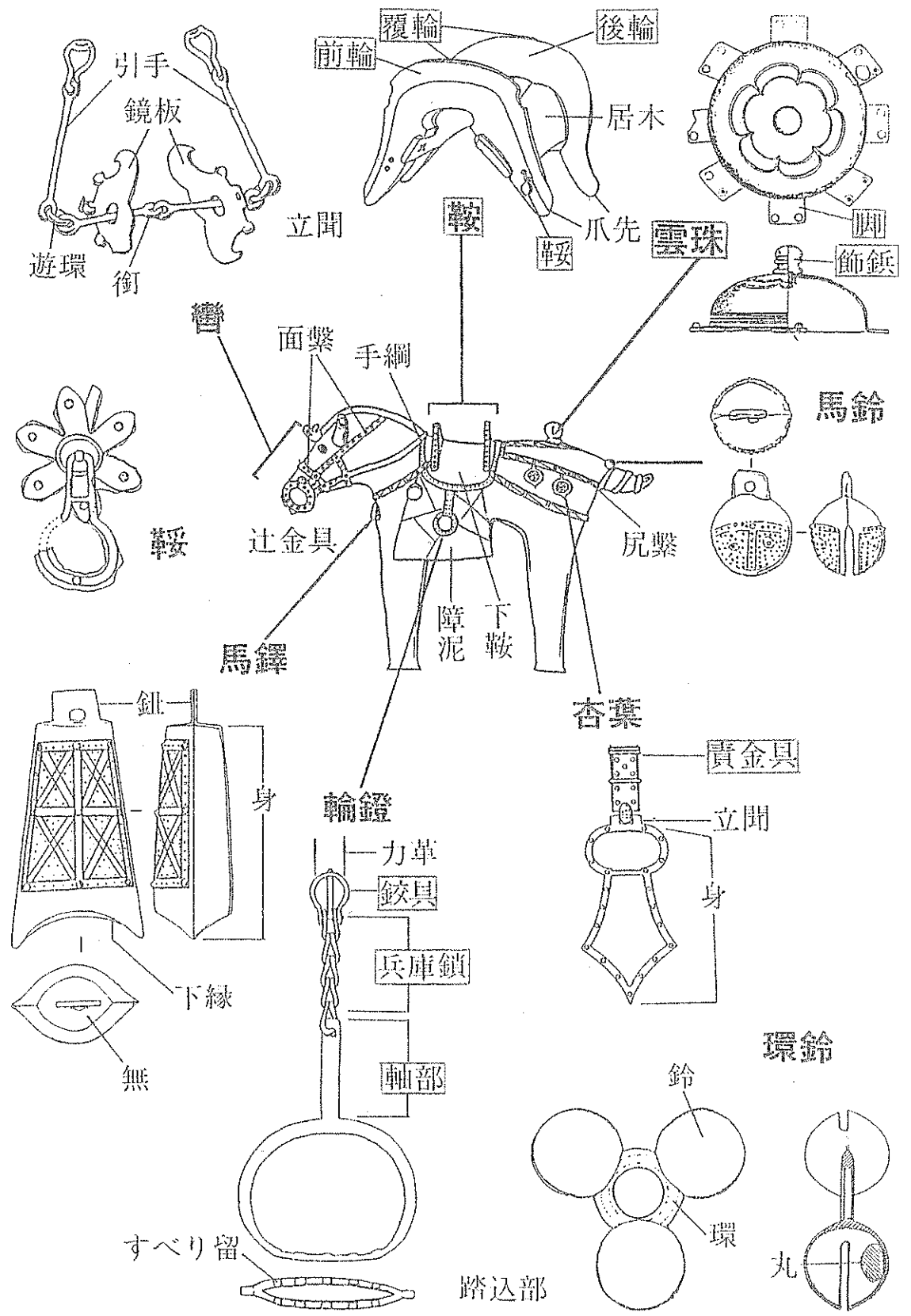
今回の古墳のうち東山紋ガ鼻古墳は盗掘の為に石室材や出土遺物がないことから、築造時期を明らかにできなかった。しかし、マキト支群では6世紀中頃から7世紀前半にかけて、マキト1号墳→マキト2号墳→マキト5号墳→マキト3号墳→マキト4号墳の順で次々と築造されていったことがわかる。

これらの古墳から出土したものには、めずらしい遺物が含まれている。まず、八釣マキト1・5号墳では馬具が副葬されている。明日香村内で馬具の副葬が確実に確認できるものには、上55号墳・真弓鏡子塚・堂ノ前古墳だけである。今回の馬具はこれらに続く出土例となる。また、八釣マキト1号墳の馬具のうち鉄地銀張雲珠は全面に銀を張っためずらしいものである。さらに子持蓋も県内では6番目の出土例であり、蓋に穴のあけられているものについて見れば、島根県岡田山1号墳につづいて2遺跡目の出土例となる。

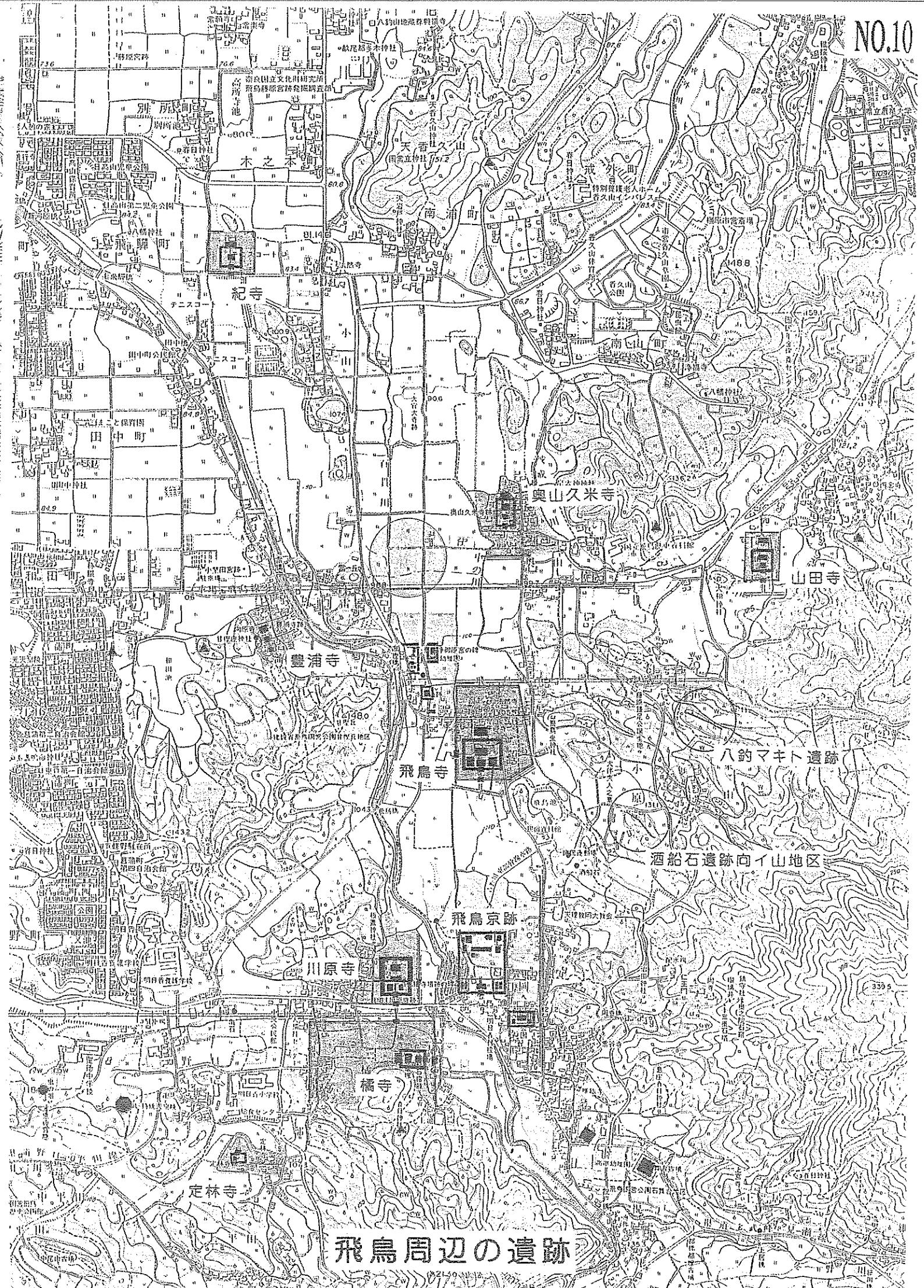
では、これらの遺物を副葬された古墳の被葬者像はいかなるものであろうか。八釣マキト5号墳は全長10mで今回の古墳では最大の規模をもち、鉄地金張の馬具を副葬するなど、当地の有力者の墓であった可能性が高い。また、八釣マキト1・2号墳もこれにつづ石室規模を有し、八釣マキト1号墳には銀張雲珠や金張鞍金具を含む馬具や、ガラス玉も150点出土していることから推定すると、当古墳群は八釣・東山地域を治めていた有力氏族の墳墓群であったと考えられる。

しかし、次の八釣マキト3号墳になると小規模な横穴式石室となり、金環や鉄釘の出土位置から推定して単葬用の墓であったと考えられる。この段階では西側の盆地に飛鳥の宮殿や寺院が建ち並びはじめる時期で、その立地からみても、豪族層あるいは官人層の墓と推定できようか。また、八釣マキト4号墳は横穴式石室ではなく、竪穴系小石室でその規模が極めて小さいことから、成人用の墓とは考えがたい。子供用あるいは改葬墓の可能性が考えられる。この地域に墳墓が作られるのはこの時期までで、これ以降は、皇子や官人達の邸宅が作られていくのであろう。

一方、掘立柱塀については7世紀後半段階のものと推定されるが、塀以外の遺構は検出できていない。尾根の稜線上に8尺等間の大型掘形の並ぶ様子は、南西に約400m離れた場所にある酒船石遺跡向イ山地区でもみられ、これとの関係が注目される。この二つの塀はほぼ平行するため、一連の繋がった施設になるかは明らかではない。二つの塀に挟まれた地域を区画しているのか、あるいはもっと広い飛鳥全体を取り囲むのかは、飛鳥東方丘陵上での今後の調査で、類例を待って検討したい。いずれにしても多くの可能性を秘めた興味深い遺構である。



馬具の名称と種類



# 石舞台発掘

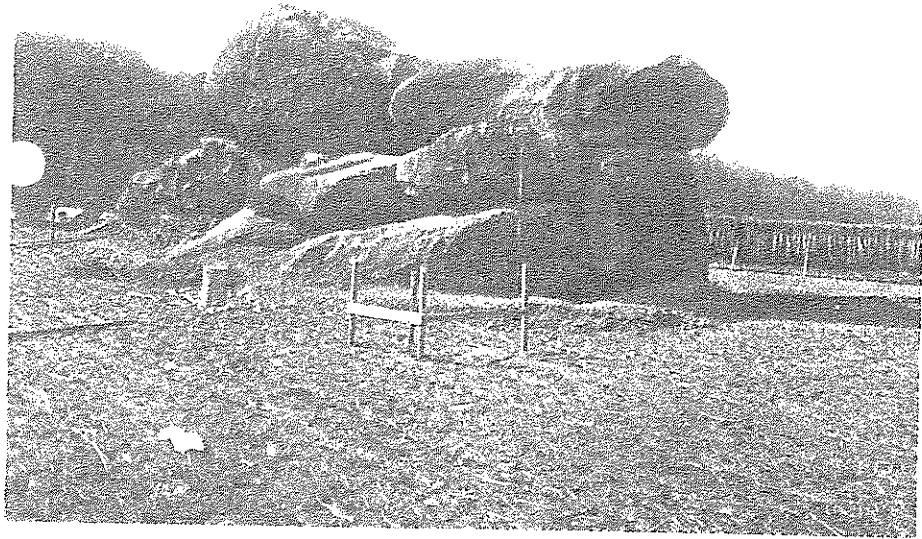
昭和8年調査フィルム

出典

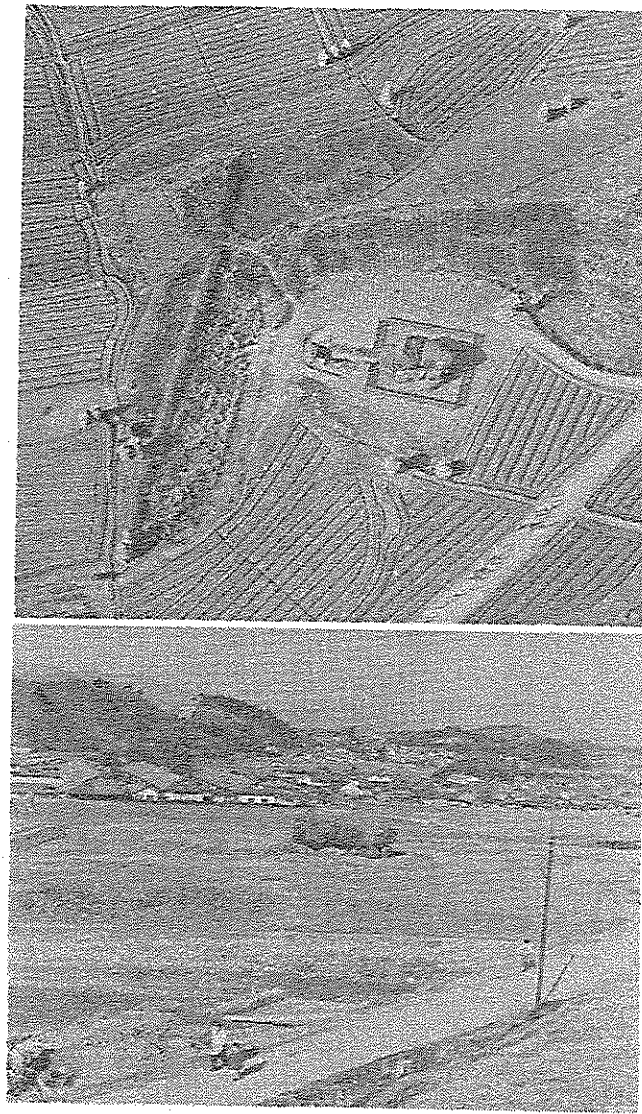
浜田耕作・高橋逸夫・梅原末治『大和島庄石舞台の巨石古墳』

京都帝国大学文学部考古学研究報告第14冊 1937

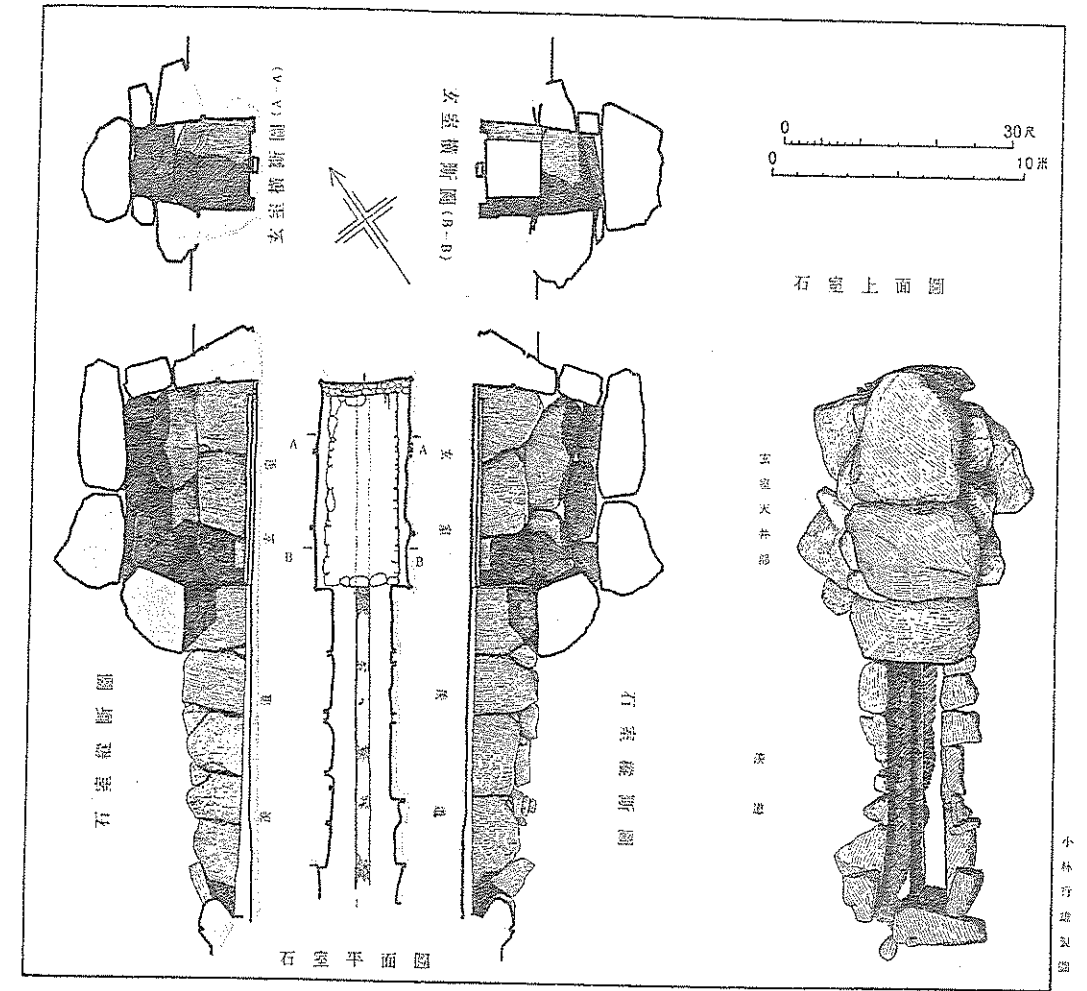
末永雅雄『大和の古墳』近畿文化会 1980



発掘調査前（昭和八年）



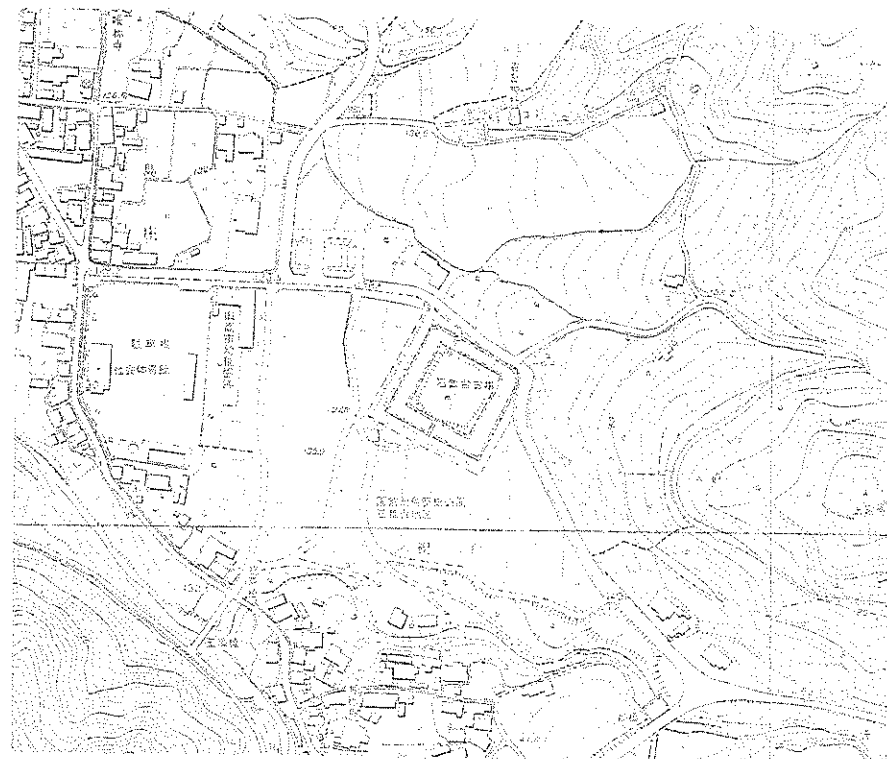
発掘調査以後（～昭和30年代）



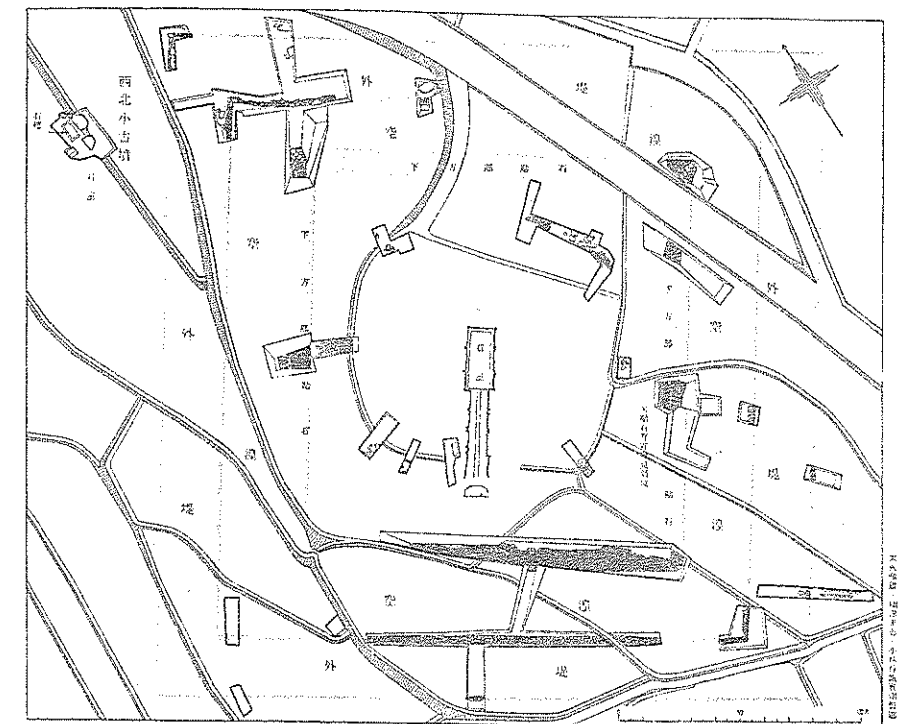
石室



西国三十三所名所図会



周辺地形図（現在）



墳丘調査

記念講演

「最近の明日香地域の成果と課題  
～古都飛鳥を考える～」

講師 関西大学名誉教授  
明日香村文化財顧問

網干善教氏



# 古都飛鳥を考える

網 干 善 教

明日香は、いま多くの人から注目されている。それはキトラ古墳の壁画、飛鳥池からの工房跡と富本銭の出土、出水の苑池遺跡、そして、酒船石北側の亀形石造物を中心とする遺構の発見である。

ところで、七世紀代は間違いなく明日香村は都飛鳥であった。ところが、七世紀代の後半、都が藤原京に移り、八世紀代には奈良に移った。さらに八世紀の後半には平城京から長岡京、さらには平安京へ遷った。僅か百年程の間の出来事であった。

都が他所へ移った後、飛鳥はどうなったのか。なかには飛鳥はさびれてしまって、荒野原になったように考えている人がいる。だが本当にそうだったのか。

今年（平成十二年）になって、明日香では大変珍しいものが発掘された。それは亀形の石造物を主とする一連の施設である。そのなかで注目されたのが饒益神宝（にょうやくしんぼう）といわれる平安時代の銅貨一枚

時代に焼失している。

蘇我馬子の島の邸宅、そして天武天皇の壬申の乱に重要な位置をしめた島宮は都の機能が明日香の地を去っても、存続していたことは知られる。すなわち都が奈良から京都に移転しても奈良は荒野になったのではなく、東大寺や興福寺、薬師寺などは立派な景観を保持していた。京都の平安京も鎌倉幕府の創設と共に政治の中心機能は鎌倉に移っても、やはり都としての景観があった。明日香もまた同じであったろう。

確かに都の機能は藤原、平城、長岡、平安京へと遷ったかも知れないが、飛鳥には平安時代や鎌倉時代に至るまで都としての景観はあった筈である。しかし飛鳥寺や川原寺などの大寺院が長い年月の間に傷みが生じてきてもそれを創建当時のように完全に修理する財政的、政治的力はすでに失われていたと見るべきであろう。しかも焼失するとなるとそれを本来の姿に復興させることはもはやできなくなっていたと思われる。そして、この頃になって人は居住していても「古都飛鳥」の景観はかつての都としての景観は失われたであろうと推察する。

飛鳥に都があった七世紀の時代から三百年、四百年間

の出土である。このお金は、わが国の奈良時代に铸造された和銅開珎から以後、平安時代に造られた十二種類の銅貨の一種である。これを「皇朝十二銭」と呼んでいる。そのうち「饒益神宝」は平安時代の清和天皇貞観元年（八五九年）にはじめて铸造され八番目の銅銭である。饒益神宝が出土したことはこの遺構がその頃まだ存続していたことになる。ただ、平安時代の銅貨が出土したからといって、その時代に亀形石を中心とする遺構がその時に造られたということではない。

それではどのように考えたらよいのであろうか。飛鳥の都があった明日香地域ではあちこちで平安時代から鎌倉時代の遺物が出土している。例えば皇朝十二銭も川原寺跡などで発見されている。また、出水で発掘調査された大規模な苑池遺構でも「川原寺」とか「岡寺」と書いた墨書土器をはじめ平安、鎌倉時代の土器が出土している。今回発掘調査された亀形石の付近でも銅貨のほか平安、鎌倉時代の土器が出土している。

一方、飛鳥時代に建立された飛鳥寺や川原寺などの大伽藍は都が飛鳥から去ってもその偉容は明日香の地域にみられた筈である。文献によると飛鳥寺や川原寺は鎌倉後まである程度の古都飛鳥の景観は保持されていたと見てよい。しかし大寺院の焼失という事態になって以後は飛鳥は大きく変貌したと考えている。

皇朝十二銭一覽

銭文	銭種	発行年	天皇	典拠
和同開珎	銅銭	和銅元年(七〇八)	元明天皇	続日本紀
万年通宝	銅銭	天平宝字四年(七六〇)	淳仁天皇	同
大平元宝	銀銭	同	同	同
開基勝宝	金銭	同	同	同
神功開宝	銅銭	天平神護元年(七六一)	称徳天皇	同
隆平永宝	同	延暦十五年(七九六)	桓武天皇	日本後紀
富寿神宝	同	弘仁九年(八二八)	嵯峨天皇	日本紀略
承和昌宝	同	承和二年(八三三)	仁明天皇	続日本後紀
長年大宝	同	嘉祥元年(八四八)	同	同
饒益神宝	同	貞観元年(八五九)	清和天皇	三代夷録
貞観永宝	同	貞観十二年(八七〇)	同	同
寛平大宝	同	寛平二年(八七六)	宇多天皇	日本紀略
延喜通宝	同	延喜七年(八五七)	醍醐天皇	同
乾元大宝	同	天徳二年(八五八)	村上天皇	同

(金銭・銀銭についても表示した)



飛鳥宮名年表

西曆	年号	宮名
580	敏達 9	磐余禰語田宮
81	10	
82	11	
83	12	
84	13	
85	14	9/5 磐余池辺雙槻宮
86	用明 元	
87	2	
88	崇峻 元	
89	2	
590	3	
91	4	
92	5	12/8 豊浦宮
93	推古 元	
94	2	
95	3	
96	4	
97	5	(11)
98	6	
99	7	
600	8	
01	9	
02	10	
03	11	10/4 小墾田宮に遷る
04	12	
05	13	
06	14	
07	15	(唐客入京)
08	16	
09	17	
610	18	
11	19	(27)
12	20	
13	21	
14	22	
15	23	
16	24	
17	25	
18	26	
19	27	
620	28	
21	29	
22	30	
23	31	
24	32	
25	33	
26	34	(桃原墓)
27	35	
28	36	
29	舒明 元	
630	2	10/12 岡本宮(飛鳥岡の傍)
31	3	
32	4	
33	5	(6)
34	6	
35	7	
36	8	6/ 岡本宮災・田中宮
37	9	
38	10	
39	11	
640	12	
41	13	

7/ 大宮(百濟)起工  
 10/ 百濟宮遷  
 11/9 百濟宮崩御(宮の北に殯)  
 (9/3 大宮起工)

